

江戸富山藩邸の調査・研究報告会

2015年1月17日(土)

東京大学埋蔵文化財調査室

会場：東京大学駒場 キャンパス
先端科学技術研究センター3号館 中2階セミナー室

江戸富山藩邸の調査・研究報告会

2015年1月17日(土)

プログラム

開会挨拶 堀内 秀樹(東京大学埋蔵文化財調査室 キャンパス計画室准教授)

プログラム1 13:10 ~ 14:00

追川 吉生(東京大学埋蔵文化財調査室)..... 1
「富山藩邸外郭部の土地利用状況 - 東京大学 CRC 地点の調査概要から - 」

プログラム2 14:00 ~ 14:40

大成 可乃(東京大学埋蔵文化財調査室)..... 7
「掘って、埋めて、また掘って - 東京大学イノベ地点の調査成果から - 」

休憩 14:40 ~ 14:50

遺物見学 14:50 ~ 15:30 14

プログラム4 15:30 ~ 16:30

小松 愛子(東京大学埋蔵文化財調査室)..... 17
「文献史料にみる江戸富山藩邸のくらし」

プログラム5 16:30 ~ 17:30

古川 知明(富山市埋蔵文化財センター)..... 33
「富山城跡の発掘調査」

-

懇親会 18:00 ~

富山藩邸外郭部の土地利用状況

東京大学 CRC 地点の調査から

追川 吉生

(東京大学埋蔵文化財調査室)

1. はじめに

東京大学医学部附属病院クリニカルリサーチセンター地点（以下、CRC 地点）は、同病院内科研究棟を含む病院の北側に建設が予定されている A 棟（A 地点）と、南研究棟を含む南側に建設が予定されている B 棟（B 地点）の 2 つの調査地点からなる発掘調査である。A 地点は富山藩邸と加賀藩邸にまたがるエリアに該当し、B 地点は加賀藩邸と大聖寺藩邸に加えて、越後高田藩邸にまたがるエリアにあたる。

発掘調査は B 地点終了が 2016 年度を予定しておりいまだ継続中であるが、今回は 2012 年 12 月から 2014 年 9 月にかけて実施した A 地点 1 次調査（A 地点の南側部分）で得られた所見をもとに、富山藩邸外郭部の土地利用状況について報告する。

2. 遺跡の概要

本郷構内の発掘調査は加賀藩邸、大聖寺藩邸を中心に行われてきた（配布図）。しかし富山藩邸についても 1984 年の中央診療棟地点で既に発掘調査が行われて以来、調査件数は少数ながら今日まで続いている。表 1 は富山藩邸を対象とした主な発掘調査である。

番号	年度	遺跡名・調査地点名（略称）	調査期間	面積 (m^2)
4	1984	医学部附属病院中央診療棟（病中）・設備管理棟（エネセン）・給水設備棟（給水）・共同溝（共同溝）	1984.10.1～1987.3.31	7700
19	1993	医学部附属病院看護師宿舎（HN）	1993.8.4～1994.1.17	746
21	1993	医学部附属病院MRI-CT棟（MRI）	1994.1.18～3.12	400
25	1994	医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場（HND）	1995.1.30～3.3	45
48	1996	医学部附属病院看護師宿舎 期（HN）	1996.11.5～1997.1.31	525
74	2008	医学部附属病院看護師宿舎 期（HHN308）	2008.4.1～8.1	550
91	2009	医学部附属病院立体駐車場（HHP09）	2009.12.13～2010.2.25	3034
101	2010	ドナルド・マクドナルド・ハウス東大（HMH10）	2010.12.9～2011.1.26	30
113	2011	医学部附属病院入院棟 期（HHWB12）	2012.3.1～11.30 2013.8,19～10,3	2786 825
125	2012	クリニカルリサーチセンターA棟 期	2012.12.17～2014.9.12	3341
148	2014	国際科学イノベーション総括棟新営地点（HIN14）	2014.1.14～7.23、8.18～8.21	1480

表 1 富山藩邸内の調査地点一覧（一部）

中央診療棟地点（4）は調査面積こそ 7,700 m^2 と広いが、富山藩邸にかかる遺構は調査区北端で検出された地境溝のみだった。立体駐車場地点（91）や入院棟 期地点（113）は、調査面積は広いものの、旧病院施設による攪乱が著しく、遺存状況は良好ではなかった。一連の看護師宿舎地点は調査面積こ

そ 500㎡前後と狭小だが、良好な遺構一括資料が出土している。

CRC 地点は 1938 年以降空閑地となっており、調査開始前は平置き駐車場として利用されていた。そのため旧施設の攪乱は極めて限定的で、遺跡の遺存状況は良好だった。本郷構内の発掘調査において、富山藩邸域の広範囲な面的調査を実施した最初の事例である。

東側に隣接する国際科学イノベーション地点（イノベ地点）の発掘調査が 2014 年 1 月から始まり、昨年前半は CRC 地点とイノベ地点の発掘調査が同時に進められる状況だった。本郷構内の遺跡における富山藩邸域の考古学的調査は、新しい段階を迎えたといえるだろう。

3. 調査成果

(1) 遺構の検出状況

江戸時代の遺構は複数の生活面で検出されている（図 1）。前述のように攪乱の影響は限定的だったが、一部の調査地区では近代以降に削平を受けているようだ。その中では特に 2 区と 7 区の遺存状況が良く、これを基準に近世 1 面から近世 5 面までの 5 つの生活面を認定している。調査では縄文時代から古墳時代の遺構を合わせて 1,509 基の遺構を検出した（表 2）。その中では、地下室の検出例が多いことが特徴の一つとして挙げられる（図 4）。

種別	遺構数
礎石	75
溝	133
井戸	19
炉跡	19
石垣	1
住居址	12
土坑	633
便所	10
柱穴	462
道路	3
地下室	115
不明	27

図 4 下は CRC 地点で検出した近世に帰属する遺構について、平面測量時の測点を立面上に投影したものだ。これをみると掘削深度が深い遺構が多いことがわかる。本地点では地下室の検出例が多いことは前述したが、それらの大部分を地下室が占めている。また調査では富山藩邸と加賀藩邸の地境と考えられる遺構を検出している（後述）。その位置と図 4 を照合すると、特に掘削深度の深い地下室の一群は標高 11.3 m 前後まで遺構の底部が達している。そして加賀藩邸側と富山藩邸側を比べれば、富山藩邸側の掘削深度が深い傾向がみとれる。

連続するフラットな大地上に立地した、2 つの藩邸の外郭部（どちらも 表 2 CRA1 次検出遺構数 詰人空間、後述）という、遺跡のあり方を比較するには恵まれた条件の本地点において、こうした傾向が垣間見えることは、両藩の地下利用の実態を解明する上で興味深い点である。今後、遺構の時期別・種類別の比較や、それぞれの藩邸の他地点における地下室の状況も踏まえた検討を加えていく必要がある。

(2) 藩邸の囲繞装置

調査地点が富山藩邸と加賀藩邸にまたがるということから、発掘調査の当初より両藩邸の地境となる遺構（囲繞装置）の検出は課題の一つだった。

富山藩邸の地境は、中央診療棟地点（4）で大聖寺藩邸との地境が検出されている。この調査では天和の火災以前の地境（1号溝・2号溝）と、火災後の地境（2号組石）がほぼ同じ位置から検出されており、火災の前後で地境の構造が変化することが明らかになった（東京大学遺跡調査室 1990）。

CRC 地点では現在のところ、調査区を南北方向に貫く SD12081・SD12089・SD12087・SD12091 が、富山藩邸と加賀藩邸との地境に相当する遺構であると考えている（図 2）。そのうち SD12091 は長軸 22.4m、短軸 0.5m、深さ 0.7 m である。

これらの溝はほぼ平行して構築されていることから、数度の造り替えが行われていたことがうかが

える（遺構年代の検討は未着手）。また溝の底部にはピットが伴うことから、これらの地境が塀だったことが想定される。

南側に隣接する立体駐車場地点（91、以下、立駐地点）では、これに連なる遺構は未検出である（追川 2012）。しかし立駐地点は遺構確認面が残る平坦部が幅 3 m 程度と極めて狭いため、本来溝であった遺構も土坑として調査している可能性もある。改めて遺構平面図と断面図を検討する必要がある。また A 地点 2 次調査では、これらの遺構の北側への続きが検出される可能性が高い。

（3）藩邸内の境界装置

調査では 133 基の溝状遺構を検出した（表 2）。そのうち幅 1.5 m、深さ 1 m 以上ある大規模な溝が 2 基あり、これらを堀と呼称している。

SD12210 は長軸 6.5 m 以上、短軸 2.2 m、断面が箱薬研形を呈して深さは 1.3 m。Gp ラインで南北方向に延びていて、SK12200 に壊されている（図 1・図 7）。覆土からは滞水した様子は見られない。西側には本遺構に沿うように、塀と考えられる柱痕を伴う長方形土坑が南北に並ぶ。

富山藩邸を描いた『江戸御上屋敷図』（富山県立図書館蔵・安政 6 年）には、御殿空間とその西側に展開していた詰人空間とを画す堀が描かれている。出土遺物全体からの検討は未着手ながら、調査時に把握した年代観や遺構の位置からは、この堀に相当する可能性が高いと考えている。『江戸御上屋敷図』では堀は水色で彩色されているが、前述のように遺構の覆土からは滞水していた痕跡は認められなかった。当該遺構が絵図に描かれている堀であったとしても、それは空堀だったことになる。

これまでの富山藩邸の調査では、表 3 のような囲繞装置と境界装置を検出した（報告書・年報に掲載されているものに限定）。そのうち看護師宿舎地点 2 期調査で検出した SD03 は、隣接する調査地点では遺構の続きが未検出のため、その性格は未確定なものである（原・大成 1999）が、ここでは遺構の検出場所と規模から境界装置としてとりあげた。

調査事例が少なく、今後の調査によって資料の増加が待たれるところだが、囲繞装置よりも境界装置の方が、堅固な構造だったことがうかがえる。これは藩邸外部との境よりも、御殿空間と詰人空間という家中の境の方が、より厳格に画されたことになる。

遺構	長軸	短軸	深さ	性格
SD12081 など	22.4 ~	0.5	0.7	囲繞
SD12210	6.5 ~	2.2	1.3	境界
中診 1 号溝		1.1	1.0	囲繞
中診 2 号組石		0.7	1.0	囲繞
看 SD03	9.0 ~	3.3	2.1	境界

表 3 屋敷境・地境比較

富山藩邸が隣接する大名屋敷は、加賀藩（CRC 地点）大聖寺藩（中央診療棟地点）のように宗藩支藩という関係を持つものである。丸の内三丁目遺跡や汐留遺跡にみられる藩邸の囲繞装置との構造の比較は、今後の検討課題の一つとしたい。

（4）巨大廃棄土坑

調査区のほぼ中央部の GK ライン付近から検出された（図 1）。複数の遺構が切り合っているが、大きくは SK11320・11167・11278 の 3 つからなりたっている（図 3）。SK11320 は南北 7.5 m、東西 5.1 m の長方形を呈している。深さは確認面から 3.4 m。遺構の北東側からほぼ 1 周するように地山が階段状に掘り込まれていて、螺旋状に遺構の底へと続く。SK11167 は南北 6.4 m、確認面からの深さは 1.7 m。東側には SK11167 へのアプローチをなすスロープが設けられている。SK11278 は南側が調査区外に続いているため本来の規模は不明。現状で南北 2 m、東西 2.9 m。北から南へと下がるスロープ状の溝 SD11322 がアプローチとなる可能性が高いが、南側の攪乱によって詳細は不明である。

これらの遺構はいずれも多量の陶磁器と貝や骨などの食物残渣が出土している。遺物の年代は 18 世紀後半から 19 世紀代である。遺構の規模や遺物量から工学部 1 号館地点 SK01 のような、藩邸内

のゴミの最終処理場に相当するゴミ穴と思われる。調査地点の南側に隣接する立体駐車場地点でも、この遺構群の延長上に19世紀代の多量の遺物を含む巨大土坑が検出されている（追川 2012）。この遺構群に続くものと思われる。

SK11320・11167・11278 は、いくつかの地下室を壊して構築されていることが切り合い関係からうかがえる。このことは18世紀後半～19世紀前半代に、富山藩邸の詰人空間に設けられていた居住エリアの一角が、巨大な廃棄施設にあてられたことを示している。

キャンパス内のこれまでの調査では、工学部1号館地点SK01やイノベーション地点SK001など、詰人空間の発掘調査において19世紀代の巨大廃棄土坑が検出されている。富山藩邸側ではCRCの一連の遺構が最初の調査例であり、それが立駐地点の北側にまで連続していたことが判明した。その連なりは南北40mに達している。該期の富山藩邸における良好な遺構一括資料であるとともに、富山藩邸内の廃棄行為の実態を解明することが期待される。

4. おわりに

CRC地点A地点1次調査は、現在遺物の洗浄と注記を行っている段階である。本稿の所見は2015年1月段階のものであり、整理作業の進展によって所見に変更が生じる可能性がある点はご了承ください。

1年9ヶ月の長きにわたるフィールドワークを共にした小川祐司氏（埋蔵文化財調査室）、広瀬唯人・片岸彰、伊早坂龍史の各氏をはじめとした（株）加藤建設の調査参加者の皆様に御礼申し上げます。

[参考文献]

追川吉生 2012 「医学部附属立体駐車場地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8

東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点：医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点』

原・祐一・大成可乃 1999 「医学部附属調印看護婦宿舍地点（期）発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2

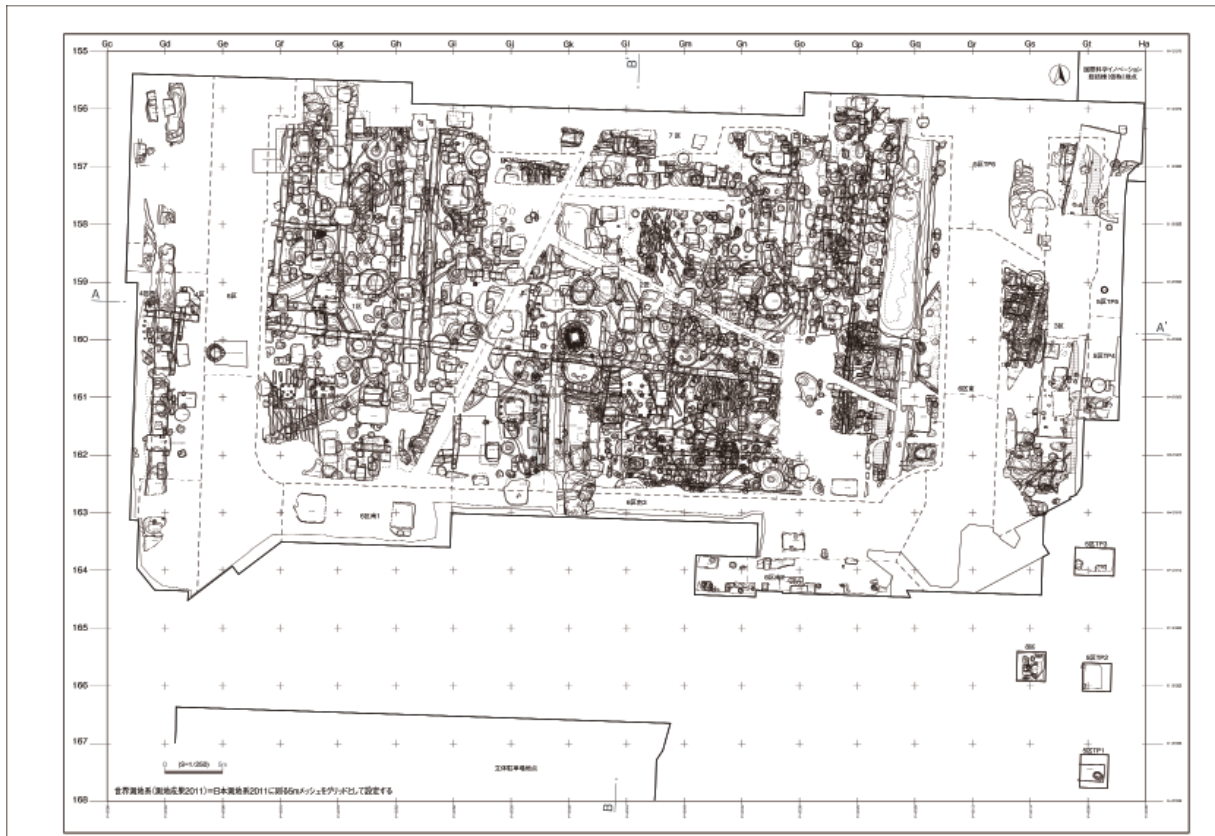


図1 検出遺構全体図

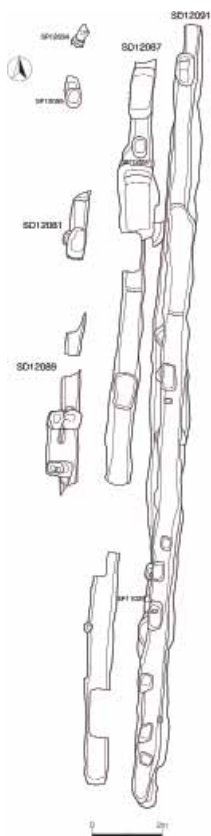


図2 SD12081・SD12089・SD12087・SD12091

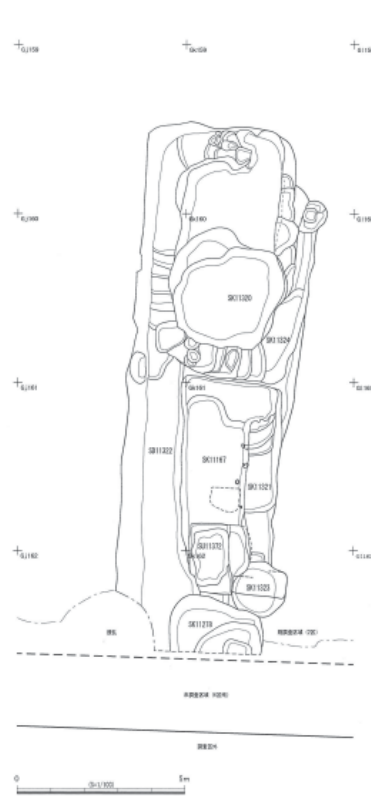


図3 SK11320・SK11324・SK11328

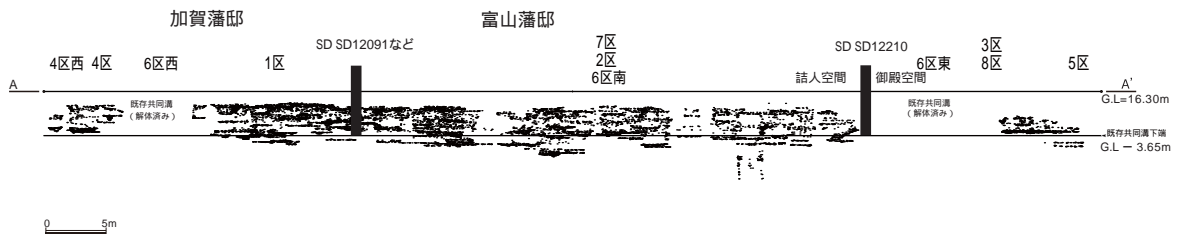
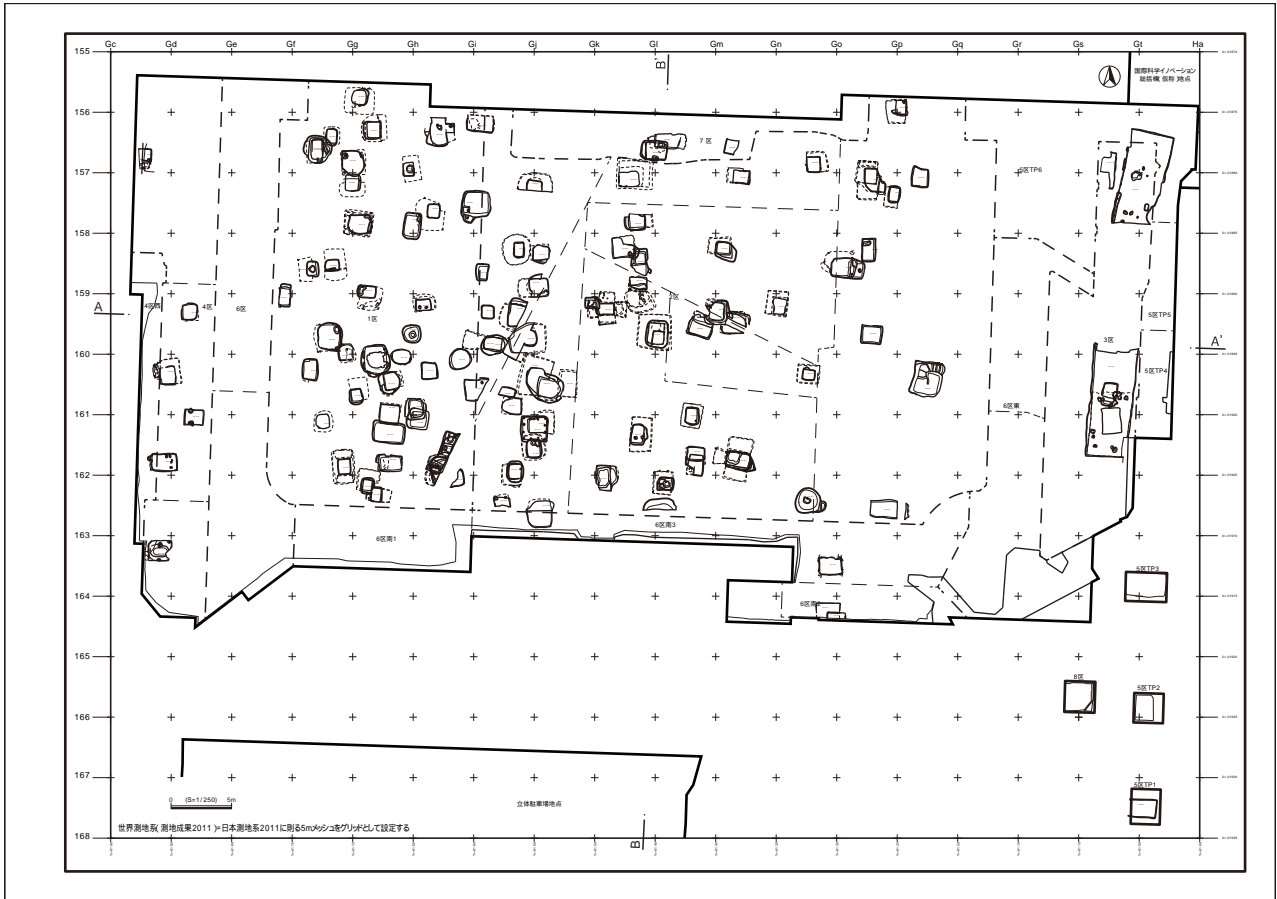


図4 地下室の分布と構築深度

東京大学（本郷）国際科学イノベーション拠点 新営建物建設に伴う発掘調査概要

大成 可乃
（東京大学埋蔵文化財調査室）

調査面積：1480㎡（外構含）

調査期間：1月14日～7月23日、8月8日～8月21日

調査対象面：4面（A（局所的）～C面、1～3面、ローム面）、1面はT.P=約15.000m前後で検出。

検出遺構数：約927遺構

出土遺物：遺物収納箱約380箱

調査担当者：大成可乃、香取祐一、小川祐司

調査概要

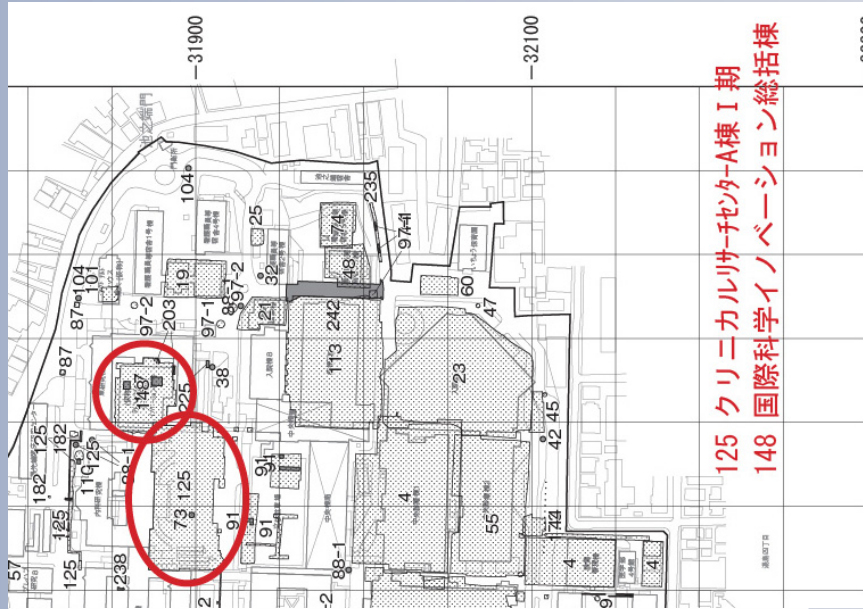
調査区南東隅に位置するSK270という大型土坑を境として空間利用が異なる状況が確認された。すなわちSX270の北および西側には地下室、井戸、採土坑、植栽痕などが検出され、SX270の南および東側には礎石を伴う柱穴列などが中心に検出される。ただし南および東側に関しても3面（表土掘削直後の面を1面）では大型の植栽痕が確認されるだけであり、1面から2面までに確認されたような柱穴は確認されない。従って3面以前の空間利用と、1、2面の空間利用が変化した可能性が高い。

なお1面から3面は、SX270を埋土した上に構築された面であることが明らかになっている。SX270の北あるいは西側は、調査当初から整地層の堆積状況などに違いが認められていたことから、A（局所的）～C面、ローム面として調査を実施している。ただしレベル的にはA面が1面に、B面が2面に、C面が3面に対応していると判断され、それは遺構の切り合い関係などとも矛盾しないようであり、今回の報告会もそれに基づいて報告を行ったが、今後は整地層や各面に帰属する遺構からの出土遺物も検討した上で対応関係のさらなる検討を行う予定である。

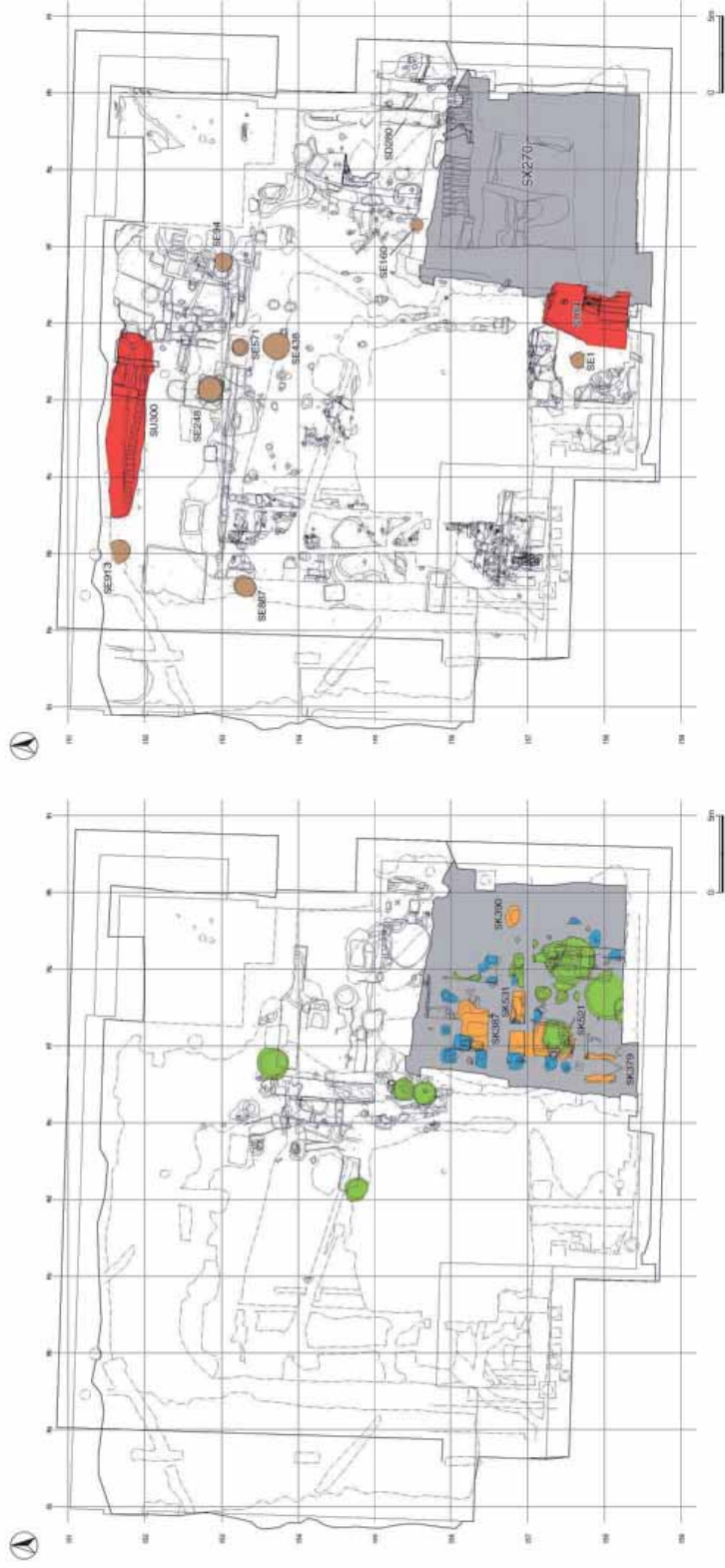
遺構が前述のような状況であるため、出土遺物の大半はSX270の北あるいは西側で検出された遺構から出土したものである。出土遺物の年代観をみると19世紀代に入るようなものはごく少なく、中心は18世紀代のものであり、19世紀代の当該地はいわゆるゴミが廃棄されるような空間では無かったことが推察される。19世紀代の藩邸を描いたとされる絵図面をみると当該地はいわゆる御殿空間に近接する場所であり、19世紀代の遺物の少なさ、また植物残滓といったいわゆるゴミが廃棄された遺構が余り認められないこともそれを裏付けるものと考えられる。

今回の報告会では触れなかったが、江戸以前の遺構も古墳時代の住居址などを中心に7基確認されているが、いずれも江戸時代の遺構によって攪乱され、遺存状態がよいものはない。ただ江戸時代の遺構覆土中（主に黒色土を主体とするような覆土）からは江戸時代の遺物より多くの土師器が出土するような遺構もあることから、江戸時代に当該地が開発される以前は古墳時代の住居などが多数存在していた可能性がある。

調査位置図



全体図(3面、ローム面)



イノベーション拠点全体図 (2)

全体図(1面、2面)

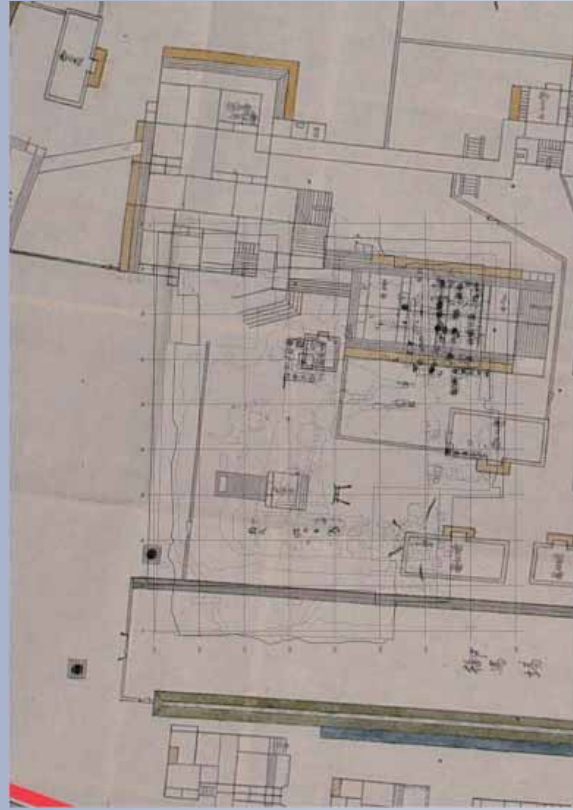


イノベーション地点全体図(1)

絵図との照合(前294+1面)



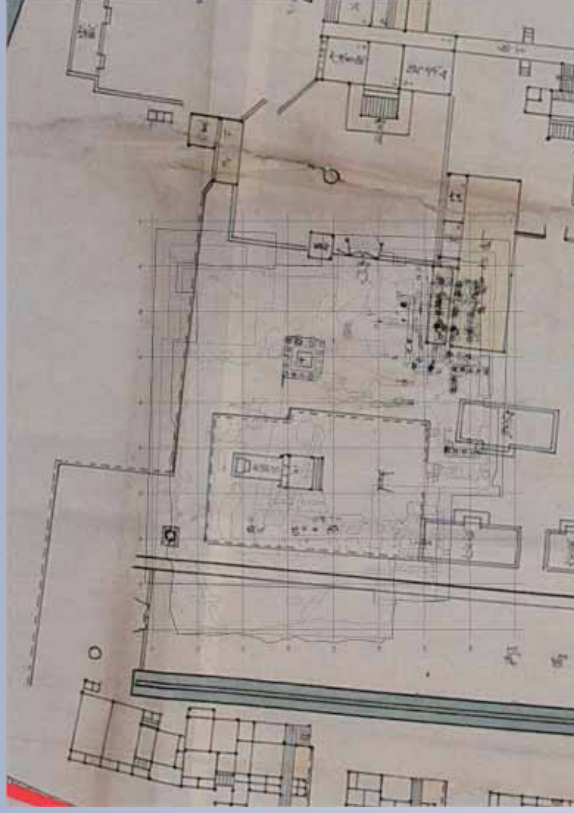
「池之端東屋敷絵図」富山県立図書館所蔵



絵図との照合(前274+1面)



「江戸上屋敷図」富山県立図書館所蔵

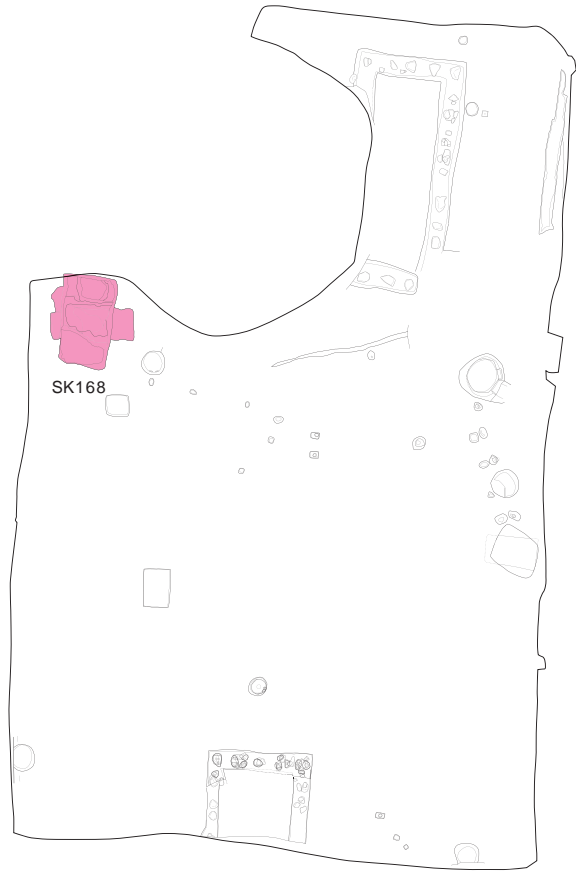


MEMO

看護師宿舎地点の遺構配置図と
展示遺物出土遺構

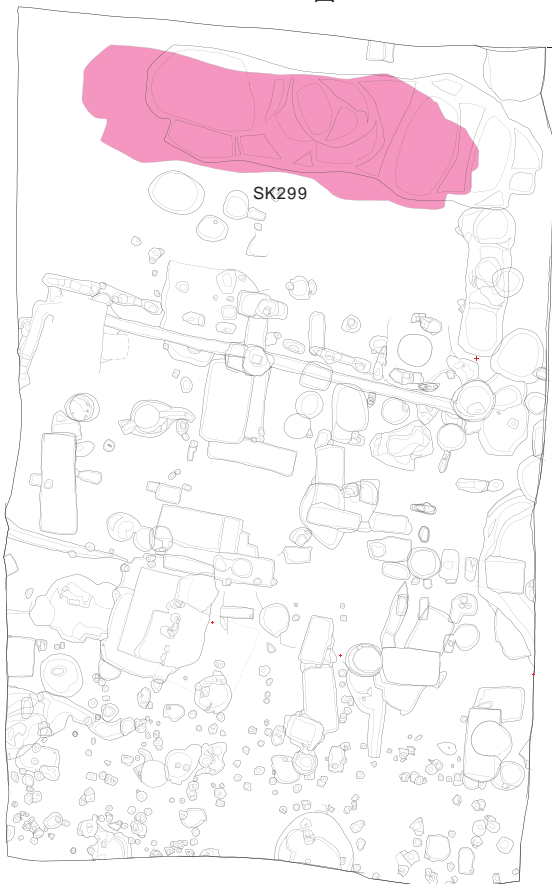


A・B面



C面

0 10m



D面

A・B面 ▶

C面 ▶

D面 ▶



調査区南壁土層堆積状況

MEMO

文献史料にみる江戸富山藩邸のくらし

小松 愛子

(東京大学埋蔵文化財調査室)

はじめに

- ・巨大城下町江戸を構成する重要な要素である武家地のうち、大名屋敷とこれが磁極となって形成される社会構造—藩邸社会¹—
- ・藩邸空間のありようは社会のありかたと表裏であることから、まず空間構造を明らかにしていく基礎作業が必要不可欠／藩邸の居住者であり藩政を担う大名、家臣団で構成される藩の位相（家格）や組織構造の解明、奢侈的・非生産的で消費を本位とする藩邸での生活を支えた藩邸外部社会（国元、江戸ほか）との関係など、多角的に検討していく必要

I 富山藩の概要

1) 富山藩の成立

寛永 16 (1639) 年 6 月 20 日、将軍徳川家光の許可を得て成立

- ・加賀藩 3 代藩主前田利常が自身の隠居するさいに、119 万石のうち嫡子（光高）へ 80 万石、次男（利次）へ 10 万石、三男（利治）へ 7 万石、自身隠居料 22 万石の配分を願い出る

分家の創出理由²：血統・家の維持、重臣対策、庶兄対策、幕府への出仕、本家の名代・後見、証人など

→10 万石以上を分与された分家は他に例がなく、10 万石という石高の大きさは富山藩前田家の位相をとらえる上で重要

2) 江戸藩邸の概要

i 江戸藩邸の全体像

- ・上屋敷：加賀藩上屋敷（拝領地 103,822 坪余）の北東部 11,088 坪余りを分与／現在の東京大学本郷構内病院地区（文京区本郷 7-3-1）と集合住宅（台東区池之端 1-5-1 ベラカーサ池之端の一部³）に位置／南側の地割変更以外は明治 4 (1871) 年まで変化なし／隣接地の土地利用：
①下谷茅町 2 丁目・町並抱地（通用門）、②講安寺境内借地（厩、長柄者などの居住空間）
- ・中屋敷：上屋敷から北に約 200m の距離の池之端七軒町（現：台東区池之端 2 丁目 2,3 番地）に無年貢抱屋敷地 1475.3 坪を所持／当初は藩主購入分と家中抱屋敷と 2 筆あったが、享保 15 (1730) 年に家中抱屋敷分の名義も富山藩主へ変更し、以後所持／文化 5 (1808) 年に隣接する大聖寺藩中屋敷の一部を譲り受けて囲い込み、嘉永 4 (1851) 年に譲り戻す変化／安政期の絵図面：御殿空間（主は 1 人カ）・詰人空間
- ・下屋敷：上屋敷から北東に約 1.6km の距離の浅草幡随院後ろ通り（現：台東区北上野 2 丁目 17～32 番地付近）に、寛文元 (1661) 年 6/12、幕府から拝領屋敷 10,000 坪を得る／明治 3 (1870)

¹ 吉田伸之「巨大城下町—江戸」（『岩波講座日本歴史』15 巻、近世 5、1995 年）

² 野口朋隆『江戸大名の名家と分家』吉川弘文館、2011 年、74 頁。

³ 明治 10 (1877) 年 11/30 付で文部省から内務省経由で東京府へ忍岡小学校敷地 (460 坪余) として割譲された分 (国立公文書館所蔵「公文録」(明治 10 年・98 巻・文部省同)。台東区文化財調査会による発掘調査 (茅町 2 丁目遺跡池之端 1 丁目 5 番地点) あり。

年以降は私邸（10,350坪）となり、関東大震災直前まで維持／藩主世子や隠居した藩主の居所、上屋敷が類焼したさいの避難所として使用／幕末期には砲術稽古⁴

- ・ 巢鴨邸：上屋敷から北西に約 3.5km 離れた巢鴨村（現：文京区大塚 4 丁目、豊島区南大塚 2 丁目）に、天保 15（1844）～安政 2（1855）年まで抱屋敷 5,224 坪を所持／「諸向地面取調書」（安政 3 年）には現藩主ではなく前藩主利保所持と明記／利保正室久美子が居住／安政 2 年に土佐藩主・山内容堂へ相対譲渡したさいの構造物：【表 1】、「抱屋敷寄帳」には両者において建物を居抜きで譲渡するような特別な由緒はないと記される

→10 代藩主利保の意志によって取得された巢鴨邸をのぞき、上・中・下屋敷とも取得以来、江戸時代を通して所持し続けている点の特徴

ii 上屋敷の空間構成

a 絵図面分析（【図 1】）

- ・ 地形に拘束、制約：上屋敷は本郷台地の先端部（標高 15m 前後）とその東側の低地（同 7m 前後）で構成／本郷台地の先端部分からは上野台地に位置する寛永寺・不忍池を望める→この最高の眺望が得られるように、応接空間である書院や露地の立地は配慮されたはず／将軍上使、老中から来客の導線を考えると書院は表御門の近くに配置→富山藩成立当初から御殿空間の表部分の立地はほぼ固定されたか？

- ・ 御殿空間と詰人空間：①御殿空間：上屋敷内部において、門・柵塀などで囲まれた空間／藩の政庁〈表〉、藩主の生活空間〈中奥〉、藩主の家族の生活空間〈奥〉／②詰人空間：①の外側の空間／家中・陪臣の居住空間、役所など／上屋敷の被災状況を示す文献史料などから詰人空間は上長屋、下長屋、谷小屋と識別、命名には地形が反映カ

→上屋敷の中央部分に御殿空間、その廻りを詰人空間が囲む二重の円形構造

- ・ 江戸藩邸の規模：「分限帳」にみる家中らの人口

上段：富山（勤番）、下段：江戸（定府）

	人持	平士	御歩	足軽	中間・小者	坊主組	その他	隠居等	女中	小計	安永年中・家中上下人数
安永9年(1780)分限帳	4	358	166	590	472	43	134	105	67	1939	6837人(男3474人、女3363人)
うち定府	0	26	10	25						61	275人(男140人、女135人)

出典 安永9年分限帳：高瀬保編『富山藩侍帳』桂書房、1987年、所収「付表1侍帳別番方表」
安永年中・家中上下人数：富山県立図書館所蔵『諸芸雑誌』巻5（前80）

※天保 14（1843）年に定府家中・足軽の帰国命令 37 人、帰国命令なしは 7 人程度

※安政 6（1859）年の勤番人数（御徒以上）：参府 51 人、在府中 62 人、在国中 28 人

Cf. 加賀藩・江戸詰人の人数⁵

寛政 10（1798）年：2824 人（家中 240 人、足軽以下 1747 人、陪臣 837 人）

・ 藩主在府年

・ 比率：家中 8.5%、足軽以下 61.8%、29.6%

→富山藩の家中と比較：家中(62人)は加賀藩の 25.8%

(…同率で考えると足軽以下 450 人、陪臣 216 人、計 728 人)

⁴ 山田忠雄（校）『旧事回顧録』、1963 年、18 頁。

⁵ 宮崎勝美「加賀藩本郷邸とその周辺」（『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点、第 3 分冊考察編』、1990 年）

【表1】安政2年2月段階の巢鴨邸の構築物

1	建家1棟	67.75坪
2	建家1棟	280.25坪
3	建家1棟	132.5坪
4	建家1棟	87.5坪
5	建家1棟	10坪
6	建家1棟	5.25坪
7	建家1棟	6坪
8	土蔵1棟	15坪
9	土蔵1棟	20坪
10	土蔵1棟	6坪
11	廊下1ヶ所	35.5坪
12	廊下1ヶ所	10坪
13	廊下1ヶ所	40.5坪
14	渡り1ヶ所	3.25坪
15	渡り1ヶ所	3.5坪
16	渡り庇1ヶ所	1.5坪
17	雪隠1ヶ所	1坪
18	井戸1ヶ所	
19	板塀5ヶ所	
20	稲荷社1ヶ所	1間×9尺
21	有東社1ヶ所	3尺5寸四方、拝殿
22	非常口1ヶ所	幅4尺片開

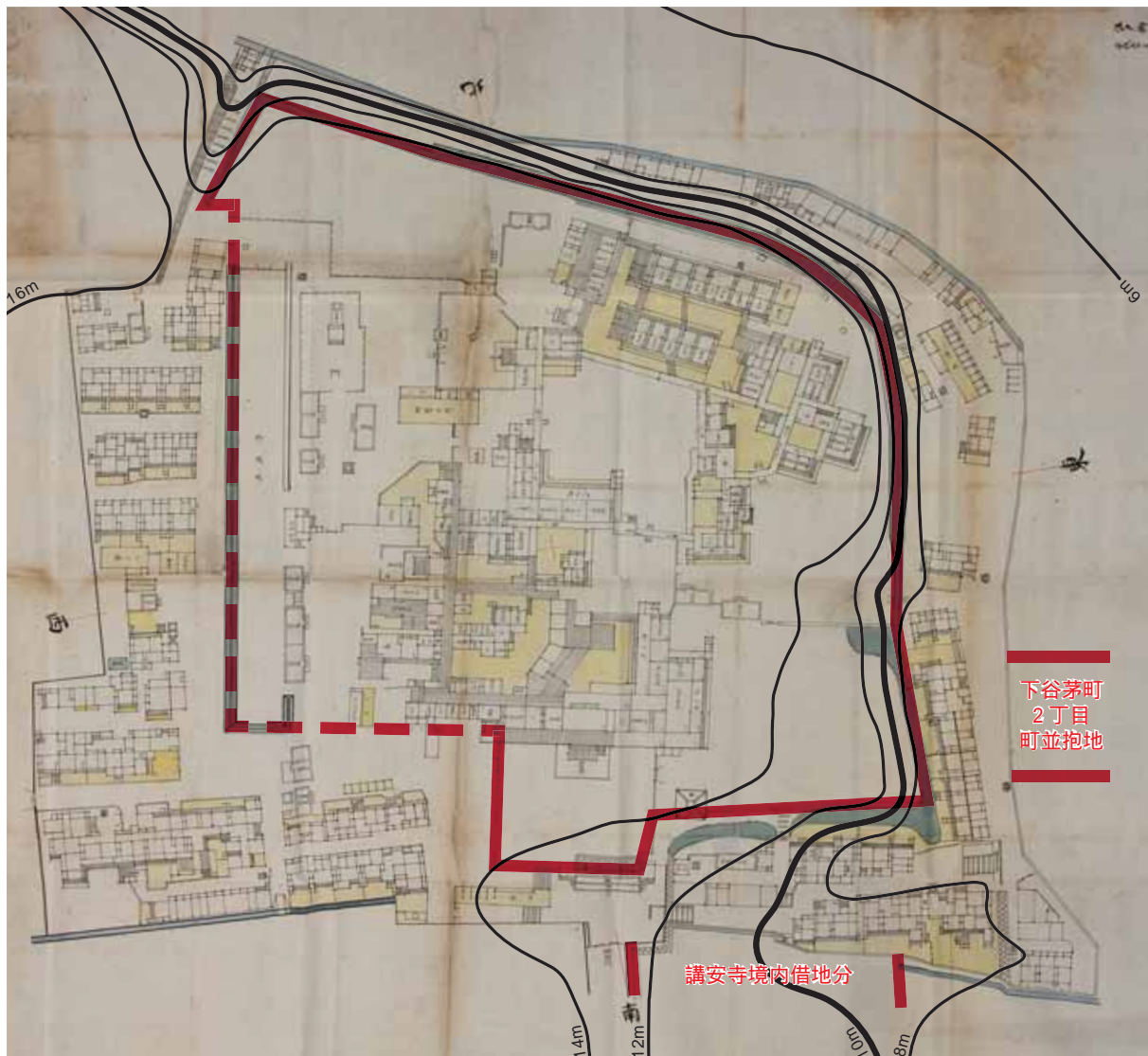


図1 富山藩上屋敷

富山県立図書館所蔵「江戸上屋敷図」(前274、安政5年)に明治16(1883)年陸軍省5000分の1測量図の等高線を重ねた

b 火災による藩邸空間の改変

- ①天和火災（八百屋お七火事）：天和2（1682）年12月28日発生、2代正甫代／衣服土蔵・荒物蔵を残して全焼／利常から譲り受けた秀吉が伏見に設けた御殿の建材（「江戸唐破風上檀造、御玄関は金張付…」⁶）と秘蔵の道具類（→看宿I期出土品カ）が焼失／天和3（1683）年3月加賀藩黒多門邸廃止に伴う地境変更、貞享2（1685）年に屋敷境に杭、貞享3（1686）～元禄2（1689）年にかけて御殿再建
- ②元禄火災（水戸様火事）：元禄16（1703）年11月29日発生、2代正甫代／全焼、当時、上屋敷に住んでいた正甫世子利興は下屋敷へ避難／宝永4（1707）年2～4月御殿再建、4/27移徙、4/29老中ら招請→宝永3年の3代利興家督相続が再建の契機／文化11（1814）年9月に松平定信が来邸「むかしより火のわざはひかゝらず、いとふるきたちにてか^{（災い）}はら^{（吉）}はな^{（無）}くたゞ板ふき也^{（瓦）}」⁷と記され、幕府が享保年間に類焼地を対象に再建する場合は瓦葺きの強制を命じたが⁸、定信が訪れた御殿はそれ以前の建物とみられ、文政火災まで焼失を免れたようだ
- ③文政火災：文政8（1825）年12月9日発生、9代利幹代／加賀藩北の御居宅より出火、全焼「御屋形并御下長屋御囲廻も残らず御類焼」⁹／文政9（1826）年12月御殿棟上げ／家斉娘浴姫の婚約（文政6年4/11）～入興（文政10年11/27）の間に発生し急遽再建する必要
- ④弘化火災：弘化3（1846）年3/22発生、11代利友代／富山藩御広式下部屋より出火、「御住所向残らず御焼失」、鎮守・長屋などは残る¹⁰／弘化3年12/4再建開始、12/26移徙→全景絵図面あり

c 火災を伴わない藩邸空間の改変

①3代利興の住まいの変遷—貞享～享保¹¹

→部屋住み（貞享4（1687）～／御殿・谷小屋）／家督相続を契機とする御殿再建（宝永4（1707）～御殿）／美を尽くした常の奥座敷等の新設（正徳3（1713）頃～／御殿）／帰国・政務を拒否し不時の間（土蔵内側の窟室）へ引き籠り（享保8（1723）～／御殿／cf.享保7夏から加賀藩邸からみえる位置に突然土蔵と築山ができる）／強制隠居後（享保9（1724）～享保18没／御殿）

②10代利保による万香園の設置など—天保～嘉永

→a 藩主の薬草園「萬香園」の設置（天保14〈1843〉春以前）→財政難による藩主子女の富山引越（天保5〈1834〉、8〈1837〉）、巢鴨邸の取得（天保15〈1844〉、利保正室の住まい）
b 財政難による定府家中・足輕の帰国（天保14〈1843〉～弘化2〈1845〉）→下谷茅町2丁

⁶ 富山県立図書館所蔵「聖廟通夜物語」（前156）

⁷ 岡嶋偉久子・山根陸宏翻刻「花月日記 松平定信自筆 三」（『天理図書館報ビブリア』113、2000）

⁸ 加賀藩は享保15（1730）年正/11の火事で上屋敷御殿がほぼ全焼し、再建にあたっては幕府から門・長屋・本家（御殿）は瓦葺きにするよう命じられている（高木喜美子校訂・編集『津田政隣 政隣記 記録5・6』、桂書房、2013年、372p）

⁹ 『加賀藩史料』（前田育徳会、清文堂出版、1980年、13編626p、以下13-626というように記す）

¹⁰ 『加賀藩史料』15-823

¹¹ 浦畑奈津子「享保年間 富山藩の危機—藩主前田利興隠居一件と一門・親族大名」（『富山史壇』162、2010年）

目町並抱地、講安寺境内借地分の返却

c 弘化火事と再建（弘化3〈1846〉）→地形・景観に配慮した便殿の新設（嘉永3〈1850〉年）

→cf. 国元・千歳御殿

→江戸藩邸が改変は災害、人生儀礼（婚礼、出産など）、藩政の動向、藩主の企図などが単発、複合しておこる：各藩に普遍的に生じるが、大名家の家格の規定、さらには藩主の家族構成、志向まで検討していく必要

3) 富山前田家の位相

i 家格

「武鑑」を切り口に、富山前田家の位相を a 将軍家、b 前田家一統に分けて検討

	加賀前田家	富山前田家	大聖寺前田家	七日市前田家
当主	加賀少将治脩卿	松平出雲守利興	松平備後守利道	前田大和守利尚
石高	102.27万石	10万石	7万石	1万石余
居城／在所	居城：金沢	居城：富山	居城：大聖寺	在所：七日市
殿席	大廊下	大広間	大広間	柳間
位階	正四位	四品	四品	
上屋敷	本郷5町目	下谷池之端	下谷池之端	半蔵御門外
献上	銀50枚・巻物20	銀20枚・綿20把	銀10枚・綿20把	蠟燭1・金馬代
拝領	銀100枚・馬巻物30・鷹	巻物20・馬	巻物10・馬	巻物3
参府年	A・4月	B・4月	A・4月	B・6月
御暇年	B・4月	A・4月	B・4月	A・6月
参府御暇上使	老中	使番	—	—

注：参府・御暇年のAは子・寅・辰・午・申・戌年、Bは丑・卯・巳・未・酉・亥年を示す。

並びは左から記載順。

出典：「明和武鑑」一、明和8(1771)年刊、国立国会図書館所蔵

a 将軍家との関係

・大名¹²の階層序列（家格）は将軍との親疎、領国・居城、石高、官位、江戸城中の詰めの間（殿席）、出自など様々な尺度ではかられ、時期によって変化／この家格差は、家臣団の数、儀礼の場や建築、城下町の規模など目に見えるかたちであらわされ、幕府はこれらを巧みに用いることで大名家の統制を可能とした／大名家の行動は家格差に拘束・規定

・富山前田家：松平賜姓／居城許可／石高 10 万石／家督相続直後：従五位下、柳の間席→1～2 年後：従四位下（四品）、大広間席

・石高 10 万石：参勤交代時に将軍上使が訪れる／将軍宣下や藩主家督相続の祝儀に老中招請がある→上使や老中招請のための応接空間（書院廻り）が必要不可欠／上屋敷焼失時も書院を再建する緊急度・優先度が高く、代替となる応接空間が下屋敷にもあり

Cf. 7 万石¹³大聖寺藩との違い

大聖寺藩：元禄 16（1703）年の火災焼失後、享保 2（1717）年になっても書院はない／享保 2 年に書院増築と利章の家督相続（1711）にともなう老中招請を計画するが、同年正月に幕府か

¹² 山口啓二「藩体制の成立」（岩波講座『日本歴史』10、近世2、1963年）。

¹³ 文政 4（1821）年、新田高 1 万石、本藩から高 2 万石に相当する年貢米が支給されるという名義で、幕府より 10 万石格の待遇を得た。

ら方角火消を命じられたこと、前年の凶作に伴う財政難により利章の実父である加賀藩 5 代綱紀より難しいという判断が下された（「中川長定覚書」）

富山藩：元禄 16 年の火災焼失後、宝永 4（1707）年に御殿再建／前年に 2 代正甫が病死し、3 代利興が家督相続→御殿再建の直後に家督相続を祝う老中招請を行っており、これを意識した再建／宝永 7（1710）・享保 3（1718）年に 6・8 代將軍宣下の祝儀を行う

→家格の差が、江戸藩邸の再建のスピード、空間構成に大きく影響

b 前田家一統との関係

・参勤交代のタイミング：加賀・大聖寺藩と富山・七日市藩という組み合わせ→加賀藩主と富山藩主が江戸滞在を共にする期間は短い

→①分家の中で家格が最も高い富山藩主は重要な局面で在国の加賀藩主の名代をつとめる（加賀藩 13 代斉泰の將軍家斉との初目見・元服・家督相続で 12 代斉広（斉泰父）の名代／幕府老中から斉泰に將軍家斉娘溶姫縁組の將軍内意を受ける¹⁴）

→②加賀藩へ地面・長屋を一時的に貸出：享保 6（1721）年加賀藩中屋敷の類焼にともない被災者の仮住まいとして富山藩上屋敷が使用¹⁵／この間は富山藩邸と仕切られる／火災発生当日に藩主利興は帰国予定で富山藩邸内の居住者が減ることから可能（cf.利興は不満？4ヶ月程で帰府、返却を受ける）／cf.加賀藩邸と接する部分（「馬場通りより西の方境御門向かいの御小屋より圍候て御遣いの筈」¹⁶）が貸出：元禄 15（1702）年 4/26 の加賀藩への將軍綱吉の御成にさいし、加賀藩の要請によって一時的に地面及び長屋が貸出（2/7～6/3）／借用中は富山藩邸と仕切られる／「甚だ宜しき御修復」の上で返却

・本分家の血縁・姻戚関係：富山前田家 1～13 代【系図】／初代と最後の 13 代：宗家加賀前田家、9 代：大聖寺前田家から養子、それ以外は先代藩主の子や弟が相続／正室は 5・7 代が加賀前田家、3 代が大聖寺前田家、1・2・8～13 代は他家、ただし 7・11・12 代は約束のみ、4・6 代は不在／子女は大聖寺前田家 5・7・12・14 代の正室が富山前田家より

→藩主実子の相続が続くことによって宗家との血縁関係は希薄に→正室・養子で血統の維持・再生産がはかられる／分家大聖寺前田家（1・2・4・12～14 代が加賀前田家からの養子、10 代が同家から正室）と比較すると宗家との血縁関係は薄い

→加賀藩は分家の御家騒動などの不始末に対して積極的な介入・解決を求められた（3 代・12 代¹⁷）／金銭・人馬を加賀藩が工面→公儀役負担、緊急事態（被災による藩邸再建、藩主の急な家督相続（ex.強制隠居にともなう 4 代利隆の家督相続費用：官位叙任＋帰国費用 2550 両¹⁸））に対して円滑に対処するため

¹⁴ 『加賀藩史料』13-222（家督相続）、13-286（溶姫縁組）

¹⁵ 金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵、加越能文庫「参議公年表」55、56（特 16.11-75）

¹⁶ 「吉川随筆」巻 9、富山県立図書館所蔵本を使用。

¹⁷ 安政 4（1857）年 4 月の富田兵部一件（窮迫した藩財政の打開策として江戸家老富田兵部が幕府老中阿部正弘に接近し、天領であった飛騨高山 5 万石を富山藩の預領とすること、願譜代を企図したことが加賀藩に探知され、兵部は加賀藩から密使を受けた前藩主利保によって帰国を命じられたその道中で割腹自殺を遂げた。加賀藩は富山藩の政局を探索して兵部に近い藩主利声を塾居させ、加賀藩主斉泰の九男（利同）に家督相続させた。その後、文久年間まで家老津田内蔵助を富山に派遣し、富山藩靜に介入する（『富山県史』通史編Ⅲ、近世上、422～428 頁などによる）。

¹⁸ 金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵、加越能文庫「中川長定覚書」103（特 16.40-77）

ii 通路と両敬

- 藩主が在府中に江戸の諸大名・旗本・寺社等と取り結ぶ関係は家格に拘束された交流の形式「通路」によって規定される
- 加賀前田家の事例¹⁹：①両敬関係（相互の訪問・応対・文通などの交際に同等の敬礼を用いる関係で、親戚・姻戚関係、地縁や個人的な交友関係を母体に家同士の関係として代々続く形で設定：5家（秋田佐竹家、会津保科家、高松松平家、富山前田家、大聖寺前田家）のみで、姻戚関係を有する全てと両敬関係を結んだわけではない／②通路（使者のやりとり、相互の訪問など最低限の儀礼的な交際関係）：全大名家の9割近くにあたる224家
- 富山前田家の場合（天保10〈1839〉年前後：【表2・3】）：①両敬関係：34家、1家（平戸藩松浦家、9代利幹と松浦静山が懇意）を除き婚姻・養子など親戚・姻戚関係をもつ／大広間詰の留守居組合（大名家で涉外担当役をつとめる留守居（加賀・富山藩では「聞番」と称す）が幕府・大名諸家等との折衝、政治・社会情報の収集を行うグループ）7家（対馬藩宗家・秋田藩佐竹家・大聖寺藩前田家・柏原藩織田家・津藩藤堂家・柳川藩立花家）のうち柳川藩立花家を除き両敬関係／②通路：大名家24家のみで古い・遠い親戚・姻戚関係、同席（柳の間詰）、近隣（高田藩榊原家・庭瀬藩板倉家）など／旗本／寺社：a前田家一統の菩提寺・祈祷所・ゆかりの寺院・御師、b徳川家の菩提寺、c姻戚関係にある大名家の菩提寺等、d江戸・湯島郷の鎮守、e上屋敷近隣の寺社で構成

II 十村の江戸滞在にみる富山藩邸と江戸都市社会

- 十村の江戸滞在：藩主の家督相続許可後、富山から家中・社家・町方・郡方から惣代各1名出府し、藩主へ家督相続の祝いを行う／郡方惣代は藩から扶持を得た「扶持人」がつとめることになっていたが、実際には代理人の場合も

藩主	7代・前田利久	8代・前田利謙	9代・前田利幹	10代・前田利保
年代	安永6(1777)年	天明8(1788)年	享和元(1801)年	天保6(1835)年
滞任者	赤祖父伝兵衛	谷井左次兵衛	高堂半吾	内山治右衛門
滞在期間	12/5～21	2/29～3/27	11/24～12/14	11/14～29
滞任先	下谷茅町浄円寺 (茅町田丸屋勘四郎口入)	下谷茅町旅宿・富沢桃庵方 →御貸小屋(西尾様続の御徒小屋)	御貸小屋 (会所奉行控役・6畳2間)	御貸小屋 (家老陪臣に依頼し御徒小屋)
家督相続祝儀 ①自分献上 ②御目見・拝領 ③御礼銀献上	①12/9 鮭塩引2本・青竹糞包・白木折 ②12/15 巻上下1具、真綿2把(目録) ③12/16 郡方銀10枚、野積谷銀1枚	①? 塩鱒2枚 ②3/25 巻上下1具、真綿2把(目録) ③3/26 郡方銀10枚、野積谷銀1枚	①12/5 鮭塩引2尺、他 ②11/28 ? ③? 郡方銀10枚、野積谷1枚	①11/18 利保:銀2枚・鮎鱒1箱・蕎麦粉1箱／久美子:干菓子 ②11/17 巻上下1具 ③11/17 郡方銀10枚、野積谷1枚
費用	①路銀750匁、(経費)1貫目、後用銀1貫目 ②後用銀300匁返却	①路銀750匁、(経費)1貫目、後用銀1貫目 ②後用銀300匁返却、長逗留追加経費700匁	(不明)	①路銀750匁、(経費)1貫目 ②?
特記事項	藩主が將軍へ鱈を献上するのに合わせて、聞番下役見習に扮して登城。本丸の蘇鉄の間、松の間、西の丸を見物	藩主の服喪により長逗留 家老家司の仲介で御貸小屋へ移る(左次兵衛は家老入江勘解由の領民)	12/9 留守居下役に扮して江戸城御殿拝見	鏡姫(秋田藩佐竹義厚室)へ自分献上品(干菓子)を届け、切れ細工物を拝領
出典	高堂家二-4	内山文書27・28、前田41	内山文書29	内山文書30、122、428、433

- 滞任場所：当初は通用門のある下谷茅町内の旅宿（7代：茅町町人田丸屋勘四郎が仲介し、浄円寺を旅宿／浄円寺：庵主は富山海岸寺弟子、8代：富沢桃庵方）→8代利謙の時より旅宿の詠えがひど

¹⁹ 松方冬子「『両敬の研究』（『論集きんせい』15号、1993年）、同「『不通』と『通路』（『日本歴史』558、1994年）、同「近世中・後期大名社会の構造」（宮崎勝美・吉田伸之編『武家社会—空間と社会—』、山川出版社、1994年）。

かったこと、藩主服喪による長逗留のために上屋敷内の御徒小屋へ滞在、以後定例化／町方惣代は10代の時も下谷茅町2丁目の「富山三度屋向の町宅」に滞在
→下谷茅町2丁目に富山藩関係の商家・寺庵が集まる

・藩邸内御貸小屋滞在中の生活

①旅装束のまま上屋敷御殿中ノロを訪れ、家督相続御用懸りをつとめる目付へ江戸到着の届（郡奉行所からの添状を提出／目付はこれを御用所に持参し、十村が到着したことを家老・御用人・御頭へ伝える／目付は十村に祝儀の日程を伝え準備をするよう指示し引き取らせる）、関係役人へ挨拶廻り

②家督相続祝儀（藩主に御目見、料理饗応（家中は使者の間、社家・町方・郡方は長炉の間）、目付より藩主よりの拝領物の目録を受け取り→藩主へ表献上（御礼銀＝定額）、自分献上（鮭・鱒・鮎など国産品／あらかじめ近習頭らに内伺いの上）：献上の方法は将軍家への献上と同様・・・江戸で会所方に依頼

③上屋敷御殿、江戸城御殿拝見など江戸市中などの観光：江戸城へは藩役人（留守居＝聞番）の便宜で、その下役（見習）に扮して一緒に登城、本丸表御殿（書院、蘇鉄・松の間）などを見物／天保6年では、江戸見物初日に日本橋・両国・浅草・吉原、2日目は日本橋に1泊して、湯島・神田・芝・増上寺・愛宕・泉岳寺を訪問、これで帰国の予定が、藩の都合によって（自分献上に対する拝領品の巻上下への御紋染付に時間を要したため）、さらに数日滞在／御用懸り目付は十村に対して市中見物を勧めるが、十村は門限が気がかりで外出できないと返答→御用懸り目付は、門番は自分の受持ちであることから「御門外留帳」にも書き留めないようにし、さらにいつ帰宅しても門内に入れるよう便宜をはかる→門番足軽4人へ金1歩2朱の贈答／巻上下拝領で世話になった役人を町方惣代のはたらきかけで、上野広小路茶屋にて接待

④贈答【表4】：①家督相続祝儀関係（御用懸り）、②逗留先である御貸小屋関係（【表5】）、③知音／あらかじめ予想された者以外にも、滞在中に便宜をはかってくれた者などもおり、格式や便宜の度合いに応じて品物・分量で調整したり、あるいは追加で現金や酒などを渡す

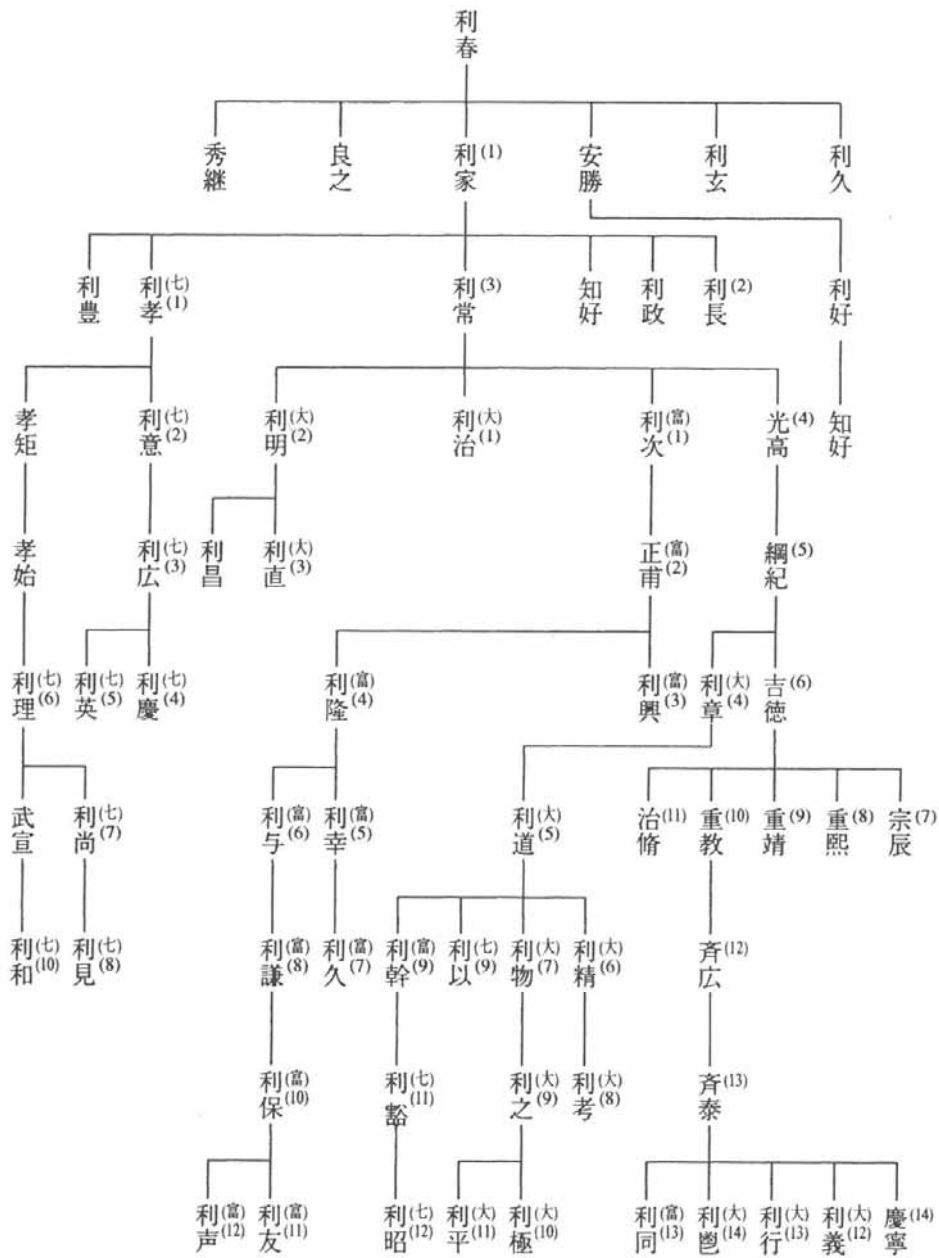
Cf. 安政地震後の施行先リスト（【表6】）

→富山前田家との間に日常的な御用・出入関係など互恵・相互扶助関係が形成

おわりに—江戸富山藩邸の特質とは…

- ・近世を通じて移転がない：土地利用のありよう、継続的な近隣との関係
- ・藩邸外部社会との関係（両敬・通路／日常生活）：地続きである加賀前田家とは異なる
 - 富山前田家の家格、藩政の動向／藩主の家族構成、個人的な志向など
 - 藩邸東側の下谷茅町2丁目などは寛永寺門前町（無年貢、寺役：上野本坊御用人足、山内掃除人足の差出）→寛永寺を磁極とする寺院社会の一部／寺院社会との関係

4 前田家略系図



(註) 数字だけは加賀藩、(富)は富山藩、(大)は大聖寺藩、(七)は七日市藩を表し、
 数は何代目かを示す。

出典：『加越能近世史研究必携』（田川捷一編著、北国新聞社、1995年）12p

富山前田家歴代

	実名	官位		父	母	生没	在職
初代	利次	侍従	加賀藩3代	前田利常	徳川秀忠娘	1617(元和3)年4月29日～1674(延宝2)年7月7日	1639(寛永16)年6月20日～1674(延宝2)年7月7日
正室	宗子		壬生藩	鳥居忠政		～1648(慶安元)年6月8日23歳	
2代	正甫	四品	富山藩初代	前田利次	八尾(側室)	1649(慶安2)年8月2日～1706(宝永3)年4月19日	1674(延宝2)年9月4日～1706(宝永3)年4月19日
正室	英子		豊後岡藩	中川久恒		～1679(延宝7)年9月12日	
3代	利興	四品	富山藩2代	前田正甫	須磨(側室)	1678(延宝6)年5月27日～1733(享保18)年5月19日	1706(宝永3)年6月6日～1724(享保9)年7月18日
正室	富紀子		大聖寺藩	前田利直		～1712(正徳2)年3月11日19歳	
4代	利隆	四品	富山藩2代	前田正甫	高日月氏(側室)	1690(元禄3)年11月11日～1744(延享元)年12月20日	1724(享保9)年7月18日～1744(延享元)年12月20日
5代	利幸	四品	富山藩4代	前田利隆	久衛(側室)	1729(享保14)年12月11日～1762(宝暦12)年9月4日	1745(延享2)年2月13日～1762(宝暦12)年9月4日
正室	総子		加賀藩6代	前田吉徳(加賀藩)		～1758(宝暦8)年6月19日26歳	
6代	利興	四品	富山藩4代	前田利隆	久衛(側室)	1737(元文2)年10月19日～1794(寛政6)年8月22日	1762(宝暦12)年11月11日～1777(安永6)年11月8日
7代	利久	四品	富山藩5代	前田利幸	律(側室)	1761(宝暦11)年3月16日～1787(天明7)年8月7日	1777(安永6)年11月8日～1787(天明7)年8月7日
8代	利謙	四品	富山藩6代	前田利興	住(側室)	1767(明和4)年12月22日～1801(享和元)年8月26日	1787(天明7)年9月29日～1801(享和元)年8月26日
正室	長子		萩藩	毛利重就		～1814(文化11)年5月25日	
9代	利幹	侍従	大聖寺藩	前田利道	(側室)	1771(明和8)年11月28日～1836(天保7)年7月26日	1801(享和元)年10月12日～1835(天保6)年10月19日
正室	勝子		富山藩8代	利謙	幾勢(側室)	1798(寛政10)年3月1日～1811(文化8)年9月27日	
継室	庸子		高崎藩	松平輝延			
10代	利保	侍従	富山藩8代	前田利謙	美須(側室)	1800(寛政12)年2月28日～1859(安政6)年8月18日	1835(天保6)年10月19日～1846(弘化3)年10月20日
正室	久美子		広島藩	浅野斉賢		～1889(明治22)年2月20日86歳	
11代	利友	四品	富山藩10代	前田利保	毎木(側室)	1834(天保5)年2月1日～1853(嘉永6)年12月20日	1846(弘化3)年10月20日～1853(嘉永6)年12月20日
12代	利声	四品	富山藩10代	前田利保	毎木(側室)	1835(天保6)年2月17日～1904(明治37)年2月16日	1854(安政元)年2月12日～1859(安政6)年11月22日
13代	利同		加賀藩	前田斉泰	こと(側室)	1856(安政3)年6月27日～1921(大正10)年12月23日	1859(安政6)年11月22日～1871(明治4)年7月14日
正室	淑		高崎藩	松平輝聴			

【表2】 富山前田家の両敬関係・通路(天保10(1839)年前後)

	藩名	殿席	実名	由来	「殿様」(利保)との間柄	
両敬関係	備後守	大聖寺藩	大広間 前田利平	もともと前田家一門 富山藩9代利幹の実方	利保養父の実家(実父は8代利謙)、 利平は従弟	
	大和守	七日市藩	柳間 前田利裕	もともと前田家一門 鐘八郎(利裕)の養方	利保の従弟(実は実弟)	
	大膳大夫	萩藩	大広間 毛利慶親	瑤台院(8代利謙正室・萩藩毛利重就娘)の里方	瑤台院は祖母(実は異母)	
	鷹司准后	公家		鷹司政熙	瑤台院(8代利謙正室)の甥にあたる 真龍院(加賀藩11代斉正室)の里方	
	安芸守	広島藩	大広間 浅野齐肃	もともと加賀前田家由来の両敬 御前様(利保正室久美子)の里方	御前様(久美子)は正室、久美子の弟	
	対馬守	対馬藩	大広間 宗義質	9代利幹妹・栄姫の婿方	栄姫は伯母、義質の子義章は従弟	
	右京大夫	秋田藩	大広間 佐竹義厚	もともと加賀前田家由来の両敬 9代利幹娘・鋭姫の婿方	妹の嫁ぎ先	
	越中守	伊勢桑名藩	溜間 松平定和	9代利幹継室の里方(継室=松平定信の姉)	異母	
	右京亮	高崎藩	雁間 松平輝承	9代利幹継室の養方(松平輝延の養女、実は松平定信の姉)	異母	
	信濃守	豊後府内藩	帝鑑間 松平近信	9代利幹二男主税の養子先	弟	
	加藤遠江守	大洲藩	柳間 加藤泰幹	9代利幹娘の嫁ぎ先	妹の嫁ぎ先	
	石川日向守	伊勢亀山藩	帝鑑間 石川総和	5代利幸娘の嫁ぎ先		
	藤堂佐渡守	伊勢久居藩	柳間 藤堂高聴	4代利隆娘の嫁ぎ先		
	前田右近	高家旗本(表高家)	柳間 前田長年	4代利隆娘の嫁ぎ先		
	黒田備前守	福岡藩	大広間 黒田斉清	7代利久正室縁談の由来		
	松平土佐守	土佐藩	大広間 山内豊資	萩藩主由来		
	喜連川左馬頭	喜連川藩		喜連川熙氏	大聖寺藩由来(5代利道娘が喜連川恵氏に嫁ぐ)	伯母の嫁ぎ先
	毛利甲斐守	長府藩	柳間 毛利元義	萩藩主由来		
	建部内匠頭	播磨林田藩	柳間 建部政醇	大聖寺藩由来		
	酒井左衛門尉	庄内藩	帝鑑間 酒井忠発	大聖寺藩由来(9代利之正室が酒井忠徳の娘)	父・利幹の甥、従兄弟正室の里方	
	酒井石見守	出羽松山藩	帝鑑間 酒井忠方	2代正甫娘の嫁ぎ先		
	松平佐渡守	出雲広瀬藩	帝鑑間 松平直寛	大聖寺藩由来(7代利物娘が松平直寛正室)		
	藤堂和泉守	津藩	大広間 藤堂高猷	伊勢久居藩主由来(4代利隆娘の嫁ぎ先)		
	松浦肥前守	平戸藩	柳間 松浦熙	父・利幹が懇意		
	佐竹老岐守	秋田新田藩	柳間 佐竹義純	秋田藩主由来		
	松平美作守	広島新田藩	柳間 浅野長訓	広島藩主由来	(正室の従弟)	
	諏訪伊勢守	信州高島藩	帝鑑間 諏訪忠恕	伊勢桑名藩由来(諏訪忠恕の正室は松平定信娘)		
	黒田甲斐守	筑前秋月藩	柳間 黒田長元	瑤台院由来(瑤台院伯母慈明院=黒田長舒継室=山内豊雍娘)		
	水野老岐守	上総鶴巻藩	雁間 水野忠實	萩藩主由来(水野忠實の父忠篤は萩藩8代毛利治親五男)		
	脇坂中務大輔	龍野藩 *本丸老中(1837-		脇坂安董	利幹娘の嫁ぎ先	妹の嫁ぎ先
加藤大蔵少輔	伊予新谷藩	柳間 加藤泰理	大洲藩主由来(利保妹が大洲藩加藤泰幹正室)			
南部丹波守	七戸藩	柳間 南部信誉	七日市藩主由来(利裕の養父利和継室が南部信鄰の娘)			
織田大蔵大輔	高家旗本 *高家職(1828-1855)	雁間 織田信恭	柏原藩主由来(6代利与娘の嫁ぎ先)			
加藤伊勢守	水口藩カ	(帝鑑間)(加藤明邦)	大洲藩由来(利保妹が大洲藩加藤泰幹正室)			
両敬以外	水野越前守	浜松藩 *本丸老中(1834-		水野忠邦	初代利次娘(梅姫)の嫁ぎ先	(正室の従弟)
	因幡守	鳥取藩	大廊下 池田慶行	萩藩主由来		
	肥後守	会津藩	溜間 保科容敬	加賀藩由来(保科容敬の正室は齊奏妹ほか)		
	中川修理大夫	豊後岡藩	柳間 中川久教	2代正甫娘英姫の嫁ぎ先		
	鳥居丹波守	下野壬生藩	帝鑑間 鳥居忠挙	初代利次正室の里方		
	毛利日向守	徳山藩	柳間 毛利広鎮	萩藩主由来		
	毛利讃岐守	清未藩	柳間 毛利元世	萩藩主由来		
	松平下総守	忍藩	溜間 松平忠堯	高崎藩主由来		
	増山河内守	伊勢長島藩 *若年寄(1822-1842)	雁間 増山正寧	萩藩主由来(5代増山正賢次男が清未藩へ養子入=毛利政明)		
	南部信濃守	盛岡藩	大広間 南部利濟	広島藩主由来(8代重晟の娘が南部利敬の正室) 加賀前田家の両敬	(正室伯母の嫁ぎ先)	
	小笠原大膳大夫	小倉藩	溜間 小笠原忠固			
	亀井能登守	津和野藩	柳間 亀井茲方			
	相良老岐守	肥後人吉藩	柳間 相良頼之			
	酒井雅楽頭	姫路藩	溜間 酒井忠学			
	榊原式部大輔	越後高田藩	帝鑑間 榊原政恒			
	真田伊豆守	松代藩		真田幸貫	(大聖寺代前田利章の娘が5代真田信安正室)	
	有馬左兵衛佐	越前丸岡藩	帝鑑間 有馬誓純			
	松平紀伊守	丹波亀山藩	帝鑑間 松平信豪			
	仙石越前守	出石藩カ	(柳間)	(仙石久道)		
	溝口伯耆守	新発田藩	柳間 溝口直諒		(正室妹の嫁ぎ先)	
松平撰津守	美濃高須藩	大広間 松平義建				
板倉越中守	備中庭瀬藩	菊の間 板倉勝資				
鍋嶋甲斐守	肥前蓮池藩カ	(柳間)	(鍋嶋直温)			
六郷佐渡守	出羽本荘藩	柳間	(六郷政恒)			

出典:富山県立図書館所蔵「東都勤集録」(市川77)

備考:人名比定は「大成武鑑」(天保11年、出雲寺版、国会図書館所蔵800-40)による。

太字分は留守居組合が一緒の分(留守居組合:笠谷和比古「大名留守居組合における互通文書の諸類型」(『史料館研究紀要』14号、1987年、10p)佐竹文庫蔵の史料による)

【表3】富山藩江戸屋敷に出入りする寺社

	所在地	寺名	宗派など	内容	墓所	
A	1	芝	浄土宗	徳川家菩提寺		
	2	小石川	浄土宗	徳川家康生母お大の墓所	前田光高正室大姫(清泰院)、前田吉徳正室松姫(光現院)墓所	
	3	京都	三井寺圓滿院	天台宗		
	4	京都	本願寺	浄土真宗		
	5	上野	御宮・御霊屋別当中(寛永寺)	天台宗	徳川家菩提寺	
	6	芝	別当中(増上寺)	浄土宗	徳川家菩提寺	
	7	上野	寛永寺常照院	天台宗	前田家宿坊	
	8	芝	増上寺源興院	浄土宗	前田家宿坊	
	9	下谷	広徳寺	臨濟宗	前田家菩提寺(正室・藩主の生母、早世した嫡子を葬送)／江戸留守寺／前田利家正室芳春院が人質時代に帰依	初代利次正室宗子・長男、2代正甫正室英子・長男主税・三男采女・8代利謙正室長子・側室幾勢・側室美須・9代利幹正室勝子・三女銚子、10代利保長男利鎮・次男利謙・長女鑑子・次女鑑子・五男利清の墓所
	10	駒込	吉祥寺	曹洞宗	(七日市藩初代墓所)	前田利家五男利孝(七日市藩初代)、2代正甫六女為子(大聖寺藩・前田利安室長寿院)、9代利幹八男利幹(七日市藩11代)の墓所
	11	京都紫野	大徳寺芳春院	臨濟宗	前田家菩提寺、利家正室芳春院創建、開山玉室宗珀	前田利家正室松(芳春院)の墓所
	12	日光	法門院	天台宗	前田家宿坊か	
	13	湯島	喜見院	天台宗	湯島天満宮別当寺／土地神	
	14	山王	観理院	天台宗	山王権現社別当寺／江戸城鎮守	
	15	高野山	天徳院	真言宗	利常正室珠姫(天徳院)創建	
	16	高野山	大楽院	真言宗		
	17	氷見	国泰寺	臨濟宗		
	18	平賀(松戸)	本土寺	日蓮宗		
	19	京都八幡	新善法寺	神社	石清水八幡宮	
	20	愛宕下	青松寺	曹洞宗	(広島藩・江戸菩提寺)	
	21	浅草	海禅寺	臨濟宗		6代利与長女恒子(丹波柏原藩・織田信広室真源院)の墓所
	22	浅草?	法恩寺	日蓮宗		
	23	池上	本門寺	日蓮宗	(利常生母=初代利次祖母の墓所)	前田利家側室千世(寿福院)=利常生母の墓
	24	京都	妙顕寺	日蓮宗		
	25	南都	東大寺龍松院	華嚴宗		
	26	上野	寛永寺覚王院	天台宗	徳川家菩提寺	
	27	京都	誓願寺	浄土宗		
	28	江戸嶋	上之坊	真言宗		
B	1	谷中	日蓮宗	富山藩前田家菩提寺／江戸留守寺／初代利次生母=利常正室天徳院ゆかりの祈祷寺	2代正甫側室・三女逸子、6代利与次男、三女峰子、三男利胤、9代利幹長男・五男利貫、10代利保三男利文・三女鑑子・八男利雄・九男利暢・十男利致・六女殊子・七女幸子・の墓所	
C	1	下谷	法華宗	亀山藩石川家菩提寺	5代利幸長女春子(亀山藩・石川総博室現成院)の墓所	
	2	牛込	浄土宗	酒井家菩提寺	2代正甫四女家子(酒井忠英・室昌安院)の墓	
	3	白銀	黄檗宗			
	4	堀内	妙法寺	日蓮宗		
D	1	上野	天台宗	不忍弁天別当宝珠院		
	2	下谷	臨濟宗	広徳寺桂香院		
	3	本郷	天台宗	真光寺瑞泉院	4代利隆四女幸子(伊勢久居藩・藤堂高雅室徧照院)の墓所	
	4	橋場	法華宗	妙高寺	初代利次長女梅子(岡崎藩・水野忠春室清光院)の墓所	
	5	七軒町	臨濟宗	東淵寺	(近隣)	
	6	無縁坂	浄土宗	講安寺	(隣接)	
	7	下谷	臨濟宗	徳雲院	(広徳寺2世住職創建)	
	8	駒込	浄土宗	蓮光寺	4代利隆六女芸子(高家旗本・前田長敦室起勝院)の墓所	
	9	(谷中)	浄土宗	新幡随院法住寺	(文久2年はしか祈祷の神楽「龍岡町遺	
	10	茅町	修験	本隆院	(隣接)	
	11		伊勢御師	山本大夫	伊勢内宮御師、宇治会合年寄	
	12		伊勢御師	福井土佐	伊勢外宮御師／加賀藩も檀那場	
	13		熱田御師	松岡齋宮大夫	尾州熱田神宮御師／加賀藩も檀那場	

A: 行き・帰りとも本御門をひらく(「御門披呼込」)

B: 帰りのみ本御門をひらく(「御出之節呼込候而、御帰之節本御門披」)

C: 本御門は開かない(「御門不披」)

D: 御門にて「参上」と呼びこみあり(「於御門参上ト呼込」)

出典: 市川文書158「御参府中諸事留并定例等」(文政4年4月～5年4月までの諸事留)

市川文書77「東都勤集録」(安政2年)→江戸城などでの会釈の有無(*)

参考: 「お殿さまとお寺—富山前田家ゆかりの寺々」富山市郷土博物館、2012

【表4】贈答先リスト(享和元(1801)年・9代)

家老	村岡書	鮭塩引2尺	
若年寄(御用人)	近藤伊織	鮭塩引2尺	
組頭	入江権兵衛	鮭塩引1尺	・家督相続御礼で奏者:杉原紙2帖
物頭	津田口右衛門	鮭塩引1尺	・家督相続御礼で奏者:杉原紙2帖
物頭	篠田金右衛門	鮭塩引1尺	
留守居(聞番)	斎藤小八郎	塩青鱈1本	・着翌日に鮎鱈11・割懸け杉箸3把
留守居添役	山田弥左衛門	塩青鱈1本	
表目付	西田覚左衛門	塩青鱈1本	・御目見え当日に配布／土産として鴨1羽・杉原紙3帖 ・帰国時に鮭塩引1尺・隅田川酒2升
表目付	服部半右衛門	塩青鱈1本	・御目見え当日に配布
会所奉行	山崎但見	塩青鱈1本	
台所奉行	小泉康之進	塩青鱈1本	
御裏奉行	高木直右衛門	塩青鱈1本	
近習	山田権左衛門・池上弥四郎・生田茂右衛門・江本藤・家城兵藏・市川小左衛門	塩青鱈1本ずつ	
近習	堀田弥八郎	塩青鱈1本	・子息万太郎へ杉原紙3帖
御次詰	市川童次・若松直右衛門・須田彦六・武川三郎右衛門・永井良助・坪田林右衛門	塩青鱈1本ずつ	
小性組	藤堂三八郎・村井藤吾	塩青鱈1本ずつ	
御勤方	黒田岡之丞	塩青鱈1本	
目付	鶴見武三郎・森孫三郎	塩青鱈1本ずつ	
会所頭取	杉山仲右衛門	塩青鱈1本	
会所小算用	藤田清太夫・村尾源齋・岡本	塩青鱈1本ずつ	
台所頭取	市川留蔵	塩青鱈1本	
台所頭取	吉田奥丞	塩青鱈1本	・土産に中折紙2帖持参 ・帰国時に自分献上で世話になったので鮭塩引1尺・酒3升
料理人	加藤藤平	塩青鱈1本	
台所目付	多賀文助	塩青鱈1本	
台所小頭	広瀬和左衛門	塩青鱈1本	
御次料理人小屋	6人	酒2升・黒作1曲	
台所役人小屋	6人	酒3升・黒作1曲	
台所長柄者		酒3升・黒作1曲	
坊主中小屋	2軒	酒2升・黒作1曲ずつ	
埋御門目付中		酒3升・黒作1曲	
通用御門足輕中		金100疋＝酒2升・黒作1曲	
表目付下役	山川守助・田中孫太夫	八寸紙2束・黒作2曲	
書院坊主	尾谷了加	八寸紙1束・黒作1曲	
御供廻り惣小屋	4軒	酒8升・黒作4曲	
	佐々木間	青塩鱈1本	
作事方	桑島仁右衛門・三輪嘉三郎	黒作2曲	・御貸小屋に逗留となった為
(本道医師)	吉田貞善	杉原紙3帖・黒作1曲	智縁
(鍼医師)	小泉自三	杉原紙3帖・黒作1曲	智縁
	松田宗五郎	塩青鱈1本	智縁
(御供押役)	若林善四郎	塩青鱈1本	智縁 ・帰国時:色々な世話になり、配下の者を数日小屋へ派遣してもらった御礼として鮭塩引1尺・杉原紙3帖
(厩支配足輕カ)	林伝助	塩青鱈1本	智縁
(定番小頭)	渡辺治左衛門	酒2升	智縁
	高海源蔵	小鱈1本・酒1升	智縁
	中野甚兵衛	酒2升	智縁
御供廻り	友右衛門	酒2升・黒作1曲	・御供押役若林善四郎支配の面々で、在国中から依頼し、逗留中世話になったためその謝礼
御供廻り	余次右衛門	酒2升・黒作1曲	・帰国時:友右衛門(金200疋)・与次右衛門(金100疋)へ始終世話になったため、勘左衛門・勘助・平助(2宋ずつ)へ毎度小屋に outgoing 世話になったため、文次郎(3匁)へ漬物仕込など世話になった
御供廻り	勘左衛門	酒2升	・江戸城見物で世話になるため、見物前日に贈る
御供廻り	文次郎	酒2升	・家督相続御祝の時、料理給仕役
御供廻り	嘉左衛門・勘助・平助	酒3升	・帰国時:献上で世話になったため
留守居下役	村尾新兵衛・石原勘右衛門	酒6升・杉原紙5帖	・帰国時:初めて通行した祝儀として
雇足輕	梅田三郎兵衛	酒2升	・帰国時:献上で世話になったため
御勤方下役	武部政右衛門	銀1両	・帰国時:状態が良い畳を提供してくれた御礼
表御門番人中		酒2升	・帰国時:自分献上で使用する台などの調達世話の御礼
台所	岡川仁兵衛	酒2升	・帰国時:数日間、江戸見物の案内に同行してくれた御礼
畳方役人中		酒2升	・帰国時:御台所より借り物で毎度懇意にしてくれた御礼
御買手所下役中		酒2升	・帰国時:御供押役の若林善四郎を介して、逗留中の旅宿として寺庵を借用するよう調べていたが、御貸小屋への滞在となったため、寺庵は使用しなかった。しかし、すでに障子などの張り替えを済ませてくれていたのでその謝礼
(御次料理人)	高海九左衛門	酒3升	
	堀内弥左衛門	酒3升	
(借宅向)		銀5匁	
家老村御内	2人	金200疋	
	中川寿川	鮎鱈13・割懸杉箸3把	

【表5】御貸小屋逗留関係先

	安永6(1777)年・7代	天明8(1788)年・8代	享和元(1801)年・9代	天保6(1835)年・10代
①御貸小屋 滞在の出願 先		<ul style="list-style-type: none"> ・旅宿の設えが悪いこと、忌中のため長逗留となることから家老入江勘解由の家司吉田氏・目付役所下役*の佐藤氏に内々に依頼し、「西尾様続の御徒小屋」への滞在が認められる 	<ul style="list-style-type: none"> ・藩側で「格別の御詮議筋これ有」り、社家(会所小屋)・町方(御徒小屋)・郡方(会所奉行御控小屋)いずれもはじめから御貸小屋への滞在が認められた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・会所から滞在中の御貸小屋の利用についてあらかじめ連絡があったが、十村本人に先立って出府した地頭で家老西尾逸角の家司石野甚兵衛に依頼して御徒小屋に滞在することになった。家老西尾へは着当日に鴨1羽・杉原紙3帖を別途送っている。また西尾方家司・徒士・小者へも贈答を行っている
②御貸小屋 備品用意	滞在なし	<ul style="list-style-type: none"> ・御徒小屋の準備が調うまで佐藤氏宅に同居(3/10朝～13朝) 	<ul style="list-style-type: none"> ・小屋入居に関わり、作事方(桑島仁右衛門・三輪嘉三郎)へ黒作2曲を贈る。 ・良い畳を提供してくれた畳方役人に対して酒2升を贈る ・御台所からの借り物で毎度懇意にしてくれた堀 	
③御貸小屋 での生活世 話		<ul style="list-style-type: none"> ・佐藤氏の世話で普請所渡り百人者から1名の派遣を受ける。あとで日数15日分の謝礼として金100疋を贈る 	<ul style="list-style-type: none"> ・御供押役・若林善四郎へ依頼し、支配下の御供廻りを小屋に派遣してもらい世話を受ける。若林へ鮭塩引1尺・杉原紙3帖、御供廻り6名にはそれぞれ酒・金などが贈られた。 ・このうち文次郎は「漬物仕込」なども行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・百人者から吉三郎の派遣を受け、逗留中の万事世話を受ける。吉三郎と吉三郎を支配する百人小人頭へ対し、贈答を行っている。
④江戸見物の 案内・世話など	<ul style="list-style-type: none"> ・町方惣代と共に聞番下役見習に扮して江戸城見物。その謝礼として引率した吉田善右衛門に対し、町方惣代と連名で酒5升・酒塩引1本を贈る。 		<ul style="list-style-type: none"> ・江戸城見物期日の前日に世話をしてくれる留守居(=聞番)下役3人に対し、酒6升・杉原紙5帖を贈る。 ・江戸を数日案内してくれた高海九左衛門に対し 	(記事なし)
⑤その他	<ul style="list-style-type: none"> ・家中惣代大竹が式台番江ノ目弥兵衛方に同居していたため、十村・赤祖父伝兵衛も「毎度参り、御馳走に預」かった。あとで酒2升を贈る 	(記事なし)	<ul style="list-style-type: none"> ・旅宿として寺庵を借り受ける用意をしていたが御貸小屋滞在となったため借用しなかった。しかし先方で障子などの張り替えなどの世話をしてくれたため、若林善四郎(御供押役)を介して銀5匁を贈る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・御用懸り目付に依頼し門限について便宜を得る。そのためか門番足軽4人へも金1歩2朱を贈っている。 ・町方惣代が働きかけ、御上下の拝領で世話になった役人4、5名を上野広小路茶屋にて接待(「御酒差上」)することに決まったので、十村にも誘いが来たが行き違いとなってしまう金額だけを支払った(金3歩と315文)。

【表6】安政地震後の町方に対する施行リスト

①富山前田家

10月14日	根津宮永町・神田相生町	家主2人	玄米2俵
10月19日	下谷茅町1丁目他3ヶ町	表・裏店410軒	玄米99石9斗5升
10月19日	池之端七軒町他6ヶ町	表・裏店176軒	玄米30石5斗5升
10月19日	下谷茅町	教証寺・本隆院・宝生院・講安寺・称仰院	玄米2石5斗
10月19日	池之端七軒町	心行寺・永昌院・浄円寺・宗賢寺・覚性寺・東湊寺・大正寺・正慶寺・妙顕寺・慶安寺・忠綱寺・休昌院	玄米6石
10月20日	湯島6丁目	表店2軒	玄米6斗
10月20日	本郷真光寺門前	表店1軒	玄米3斗5升

備考:

講安寺門前表・裏店14軒に対しては講安寺も、根津宮永町家主1人に対しては寛永寺(信解院・真覚院・明静院・種脱院)も施しを行っている。

②加賀前田家

10月7日	本郷5丁目	表店6軒・裏店5軒	白米1石1斗
10月7日	本郷6丁目	表店3軒・裏店3軒	白米6斗
10月7日	本郷喜福寺門前	表店4軒	白米4斗
10月10日	神田相生町	家主1人	白米1斗
10月下旬	本郷1丁目	表店4軒	白米4斗
10月下旬	本郷3丁目	表店2軒	白米2斗
10月下旬	本郷4丁目	表店2軒	白米2斗
10月下旬	本郷春木町2丁目	表店1軒	白米1斗
10月下旬	本郷金助町	表店8軒	白米8斗
11月11日	本郷元町	表店6軒	白米6斗
10月23日	深川黒江町	抱屋敷家守ら97人	玄米25俵

出典:国会図書館所蔵「武家方并寺社等ニテ施差出候一件」(旧幕引継書、808-46)

備考:12・13番組市中取締掛名主からの回答書より作成/12・13番組では富山・加賀前田家以外の大名家からの施行はない

MEMO

富山城の研究成果

古川 知明
(富山市埋蔵文化財センター)

1. 富山城史概要

- 1 戦国期 (1542 頃 ~ 1581) 越中守護代神保氏 城郭初整備
- 2 織豊期 (1581 ~ 1585) 信長重臣佐々成政国主
- 3 廃城期 (1585 ~ 1605) 破却、秀吉重臣前田氏在番
- 4 江戸初期 (1605 ~ 1609) 前田利長隠居城整備(虎口石垣造)
- 5 廃城期 (1610 ~ 1640) 加賀藩在番
- 6 富山藩初期 (1640 ~ 1660) 初代前田利次 加賀藩から借城
- 7 富山藩城期 (1661 ~) 改修後、富山前田家藩主 13 代の藩城

2. 富山城の構造

- ・性格 : 隠居城(利長) 富山藩城(寛文元年~)
- ・位置 : 北陸街道・飛騨街道の結節点(街道=軍事・物流)
- ・地形基準: 神通川(川幅 200m)を後堅固
- ・曲輪 : 方形基調(巨大化した馬出)
- ・縄張型式: 内郭(本丸・西ノ丸・薪丸・二ノ丸): 連郭式
外郭(三ノ丸) : 梯郭式 } **聚楽第型**
- ・大手 : 西側(利長: 惣構武家地を置く) 南側(寛文元年~?)
- ・石垣 : 本丸虎口(大手・搦手)・二ノ丸虎口のみ石垣造、他は土塁
利長期: 大手内枡形・搦手喰違、小型刻印、鏡石調達、穴生: 穴太産穴生又助
富山藩期: 大手内枡形(拡張)・搦手外枡形、大型刻印(五芒星形)、鏡石継承
- ・鏡石 5 石配置: 陰陽五行説に基づく配置(仮説)

3. 城内の発掘調査成果

本丸

- ・御殿外踏石(花崗岩: 在地産でないもの)
- ・【推定】御殿建物基礎(地下構造=布堀+礎石)
- ・富山藩期土塁直下から利長期曲輪面(土塁位置が移動した)
- ・本丸天守台: 造成盛土のみを確認(天守閣建造はなかった)
- ・石垣解体修理(鏡石の高度な石割技術)
- ・利長期の瓦(前田家初の家紋瓦=江戸加賀藩邸の1期金箔瓦と類似)

西ノ丸

- ・焼失材の堆積層（富山藩期における大火廃材集積跡）
- ・内堀の基底部確認（土塁傾斜と高さを復元）

三ノ丸

- ・【現在調査中】外堀の位置と規模・構造を確認

4 富山城構造の理解 利長期と富山藩期の相違

文献による理解 = 万治4年江戸幕府老中連署奉書に基づく「修理・拡張」

発掘調査成果・絵図分析

神通川の位置変化に基づき、内郭の大部分を大がかりに変更した
〔虎口石垣形状の変更・曲輪形状の変更・土塁位置変更・内外堀位置変更〕

5 江戸藩邸と富山藩の今後

- * 平成28年秋 北陸新幹線開業1周年記念「富山と江戸を結ぶ考古展」を計画中
出土品展示のほか、富山城本丸御殿・江戸上屋敷御殿の模型を比較展示
- * 参勤交代一覧の作製から

主要研究史

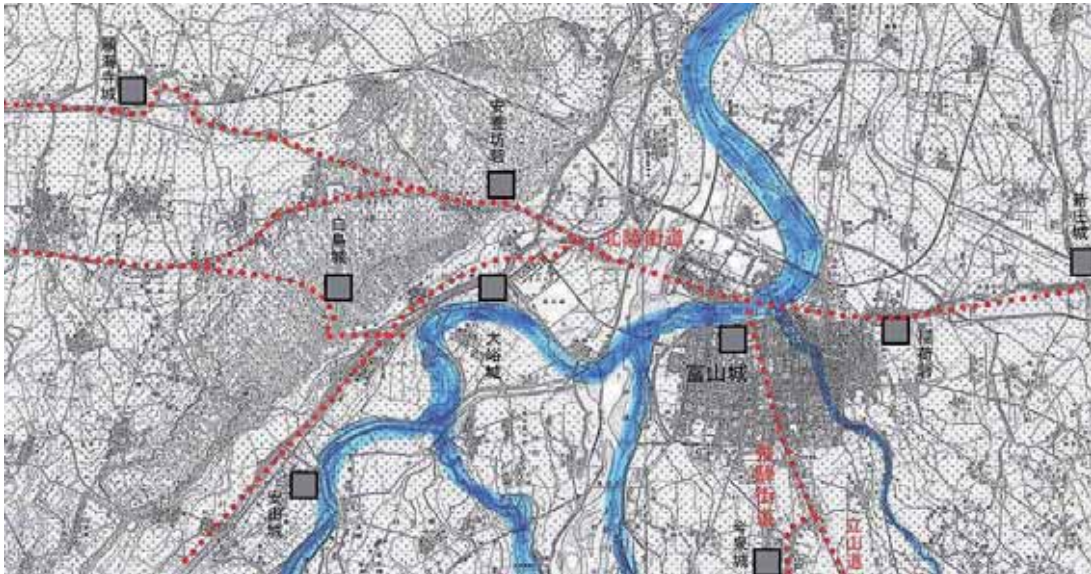
- 1935年 金森久一『富山城の起源』*戦国期が主
- 1956年 山田孝雄「富山之記」『典籍雑攷』寶文館 *国語学の検証
- 1971年 『富山史壇』50・51号特集「富山藩の研究」*政治経済史研究が主
- 1974年 坂井誠一『富山藩』巧玄出版 *藩史の総括
- 1975年 高岡徹「富山城」『日本城郭大系』7 新人物往来社 *城郭史・文献
- 1983年 奥田淳爾『佐々成政』桂書房 *戦国武将人物史・政治史
- 1986年 遠藤和子『佐々成政』サイマル出版会 *戦国武将人物史
- 1992年 林寺巖州による富山城址公園出土遺物の報告
- 1993年 「富山城跡」を埋蔵文化財包蔵地(主郭9ha)、「中世富山城推定地」(12ha)
- 1993年 田中喜男『城下町富山の町民とくらし』高科書店
- 1995年 深井甚三『近世の地方都市と町人』吉川弘文館 *絵図の再評価
- 2002年 本丸石垣3次元レーザー測量を開始(2008年、5,600石を調査)
- 2003年 富山城址公園で学術的な試掘調査を開始、戦国期富山城位置確定
- 2004年 「富山城跡」に三の丸を追加(41.3ha)
- 2004年 城下町の本格的発掘調査を開始(西町・二番町・一番町・旅籠町)
- 2005年 富山市埋蔵文化財センターホームページ「富山城研究コーナー」開設、226項目掲載
- 2005年 富山市郷土博物館が富山城としてリニューアル
- 2005
~ 2006年 本丸石垣の部分解体修理 鏡石1石の解体
- 2008年 千歳御殿正門(千歳御門)富山城に移築
- 2009年 富山城石垣ツアー開始(2013)
- 2009年 三の丸大手門石垣を検出
- 2010年 「富山城跡」の中世以前を「総曲輪遺跡」(27ha)として分離
- 2010年 富山城石垣調査により、鏡石は慶長期調達であることを確認
- 2010年 北日本新聞社新書001『越中460年を行く 富山城探訪』
- 2011年 「富山藩主前田家墓所(長岡御廟所)」1.2haを埋蔵文化財包蔵地に
- 2013年 「富山城下町遺跡主要部」を追加(6.2ha)城下町全体の1.5%
「中世富山城推定地」を「千石町遺跡」に変更
- 2013年 スマホアプリ「ブラ富山」開始 古地図・古写真の画像・説明表示(中心市街地)
- 2014年 古川知明『富山城の縄張と城下町の構造』桂書房

富山城・江戸藩邸上屋敷 年表

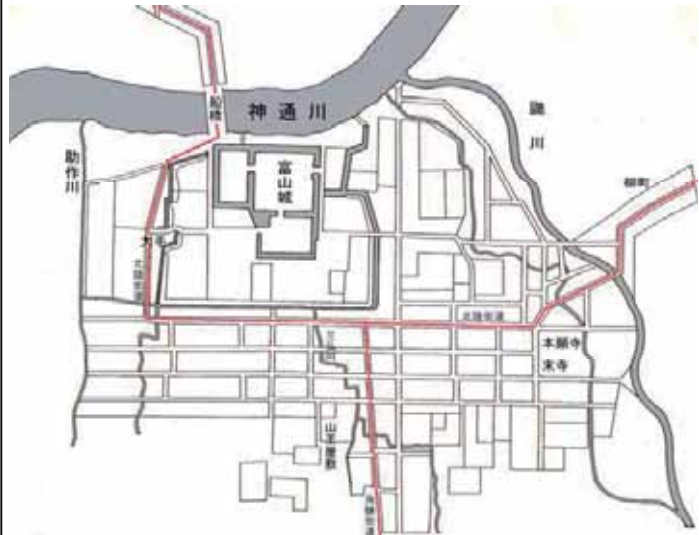
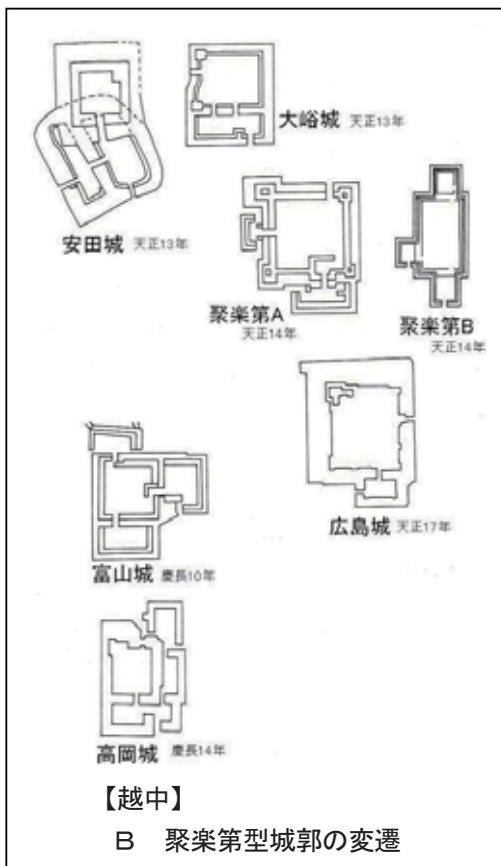
	年代	歴史事項・関連事項	藩主御殿等	城主	江戸藩邸(本郷邸)
近現代	昭和 29(1954)	富山産業大博覧会			
	昭和 20(1945)	戦災			
	昭和 5 (1930)	県庁焼失			
	明治 33(1900)	県庁を城址に新築			
	明治 32(1899)	本丸焼失	(御殿) 焼失		
	明治 16(1883)	富山県設置、旧本丸御殿を県庁	御殿一部取壊		御殿を医学教室
	明治 3(1870)	練兵場築造			
富山藩	文久 3(1863)	大火 三ノ丸など焼失		利同 13	
	安政 5(1858)	安政地震で本丸石垣など損壊(『地水見聞録』)			
	安政 2(1855)	櫓門造営、城内焼失	千歳御殿再建		
	嘉永 7(1854)	大手枳形御門普請		利声 12	
	嘉永 5(1852)	大手門・櫓門修築			
	嘉永 4(1851)	本丸普請		利友 11	
	嘉永 2(1849)	利保隠居所千歳御殿・御涼所等	千歳御殿創建	利保 10	
	天保 4(1833)	普請着手	御殿再建		
	天保 3(1832)	本丸・大手門など修理許可			
	天保 2(1831)	大火で城・民家焼失		利幹 9	
	寛政 12(1800)	助作御門普請			
	寛政 7(1795)	本丸搦手門石垣修理許可 神通川氾濫、堀・塀損壊。			宝永 4 御殿完成 元禄 16 類焼・板垣
	寛政 3(1791)	枳形御門台(本丸石垣)修復		利謙 8	元禄 9・16 地震で御殿壁落下
	天明 3(1783)	神通川氾濫、城内水没		利久 7	元禄 3 講安寺から借地(637坪余)
	安永 3(1774)	二階櫓御門修復			貞享 3or 元禄 2 御殿普請
	享保 8(1723)	本丸搦手北石垣破損		利隆 4	
	正徳 4(1714)	本丸より出火	御殿焼失		
	宝永 3(1706)	大地震		利興 3	天和 2 御殿不残類焼
	天和 2(1682)	神通川氾濫、舟橋の鎖切断			
	延宝 5(1677)	富山城普請許可			
延宝 3(1675)	大火により殿宇・米庫類焼		正甫 2		
寛文 11 (1671)	時鐘を鑄造、城内に設置				
寛文 8(1668)	大地震				
寛文元(1661)	天守・櫓門修営し、富山藩居城として幕府許可	利次御殿造営			
加賀藩・廢城	万治 3(1660)	大地震の修復開始			
	万治 2(1659)	大地震			
	正保 (1644-48)	「越中国富山古城之図」成立(正保城絵図写)＝利長の城把握		前田利次(富山藩初代)	富山藩上屋敷(加賀藩邸より貸与 1.1 万坪)
	寛永 17(1640)	利次、百塚築城まで仮に富山城入			
	寛永 16(1639)	富山藩成立(分藩、10 万石)			
	寛永 8(1631)	船橋用材を秋田に求める			加賀藩下屋敷→上屋敷
利長隠居	慶長 19(1614)	留守将津田刑部			
	慶長 14(1609)	大火で城焼失			
	慶長 12(1607)	修築材を能登羽咋郡に手配			
前田氏が在番	慶長 10(1605)	前田利長隠居し築城。「越中国富山古城之図」門石垣造。	利長御屋形		
	慶長 4(1599)	利長金沢へ		前田利長	
	慶長 2(1597)	前田利長入城(守山城から)			
	慶長元(1596)	神通川に船橋架設			
戦国城郭	天正 18(1590)	富山城留守を前田美作守直知		前田方	
	天正 13(1585)	秀吉佐々成政を降し、破却指示		織田・羽柴方	
	天正 10(1582)	神保長住幽閉、富山城佐々奪還			
	天正 9(1581)	佐々成政居城 *天正 7 年説あり		佐々成政	
	天文 12(1543)	富山城を築城(越中守護代神保長職 or 神保家臣水越勝重)(往来本『富山之記』慶長 10 頃)		神保氏	

富山藩江戸藩邸 基礎情報

区分	所在地	現在地	敷地	備考
上屋敷	本郷	東大本郷キャンパス構内	1万1088坪(天保6)	637坪講安寺地借地(元禄3)
中屋敷	下谷池ノ端	台東区池之端2丁目	1万坪	
下屋敷	浅草幡随院後	台東区東上野		



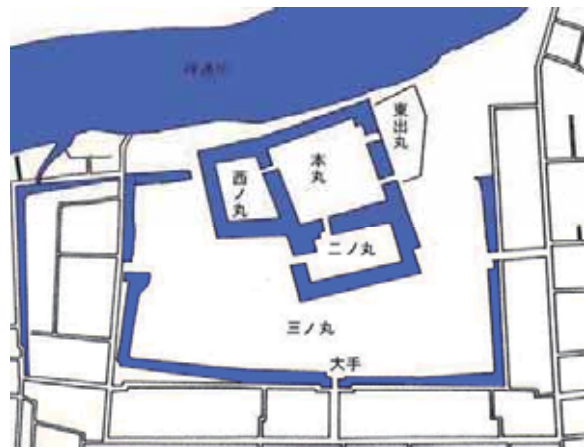
A 戦国後期～江戸初期の河川流路・主要幹道と城郭



C 「越中国富山古城之図」にみる慶長期富山城・城下町の構造



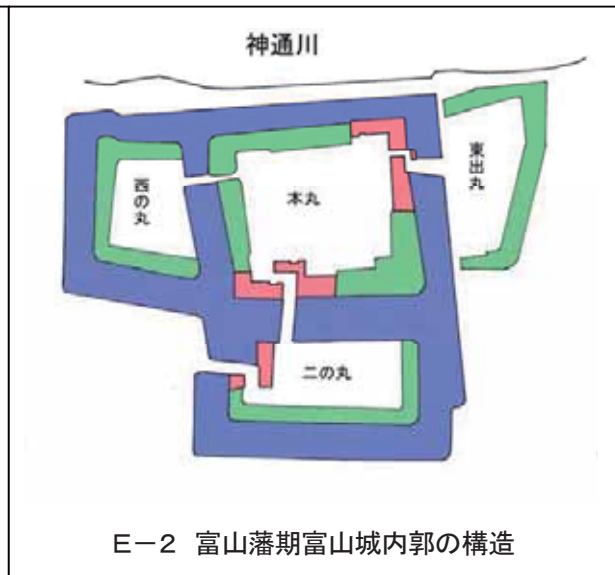
D 利長期（慶長 10～14）の城郭構造



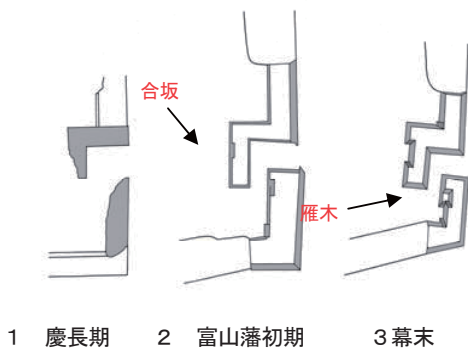
E 富山藩期（寛文元～明治初期）の城郭構造



D-2 慶長期富山城内郭の構造

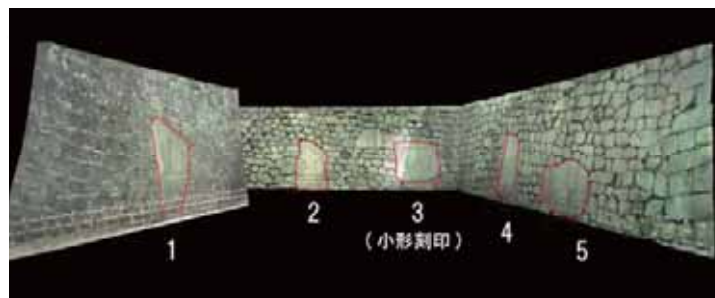


E-2 富山藩期富山城内郭の構造

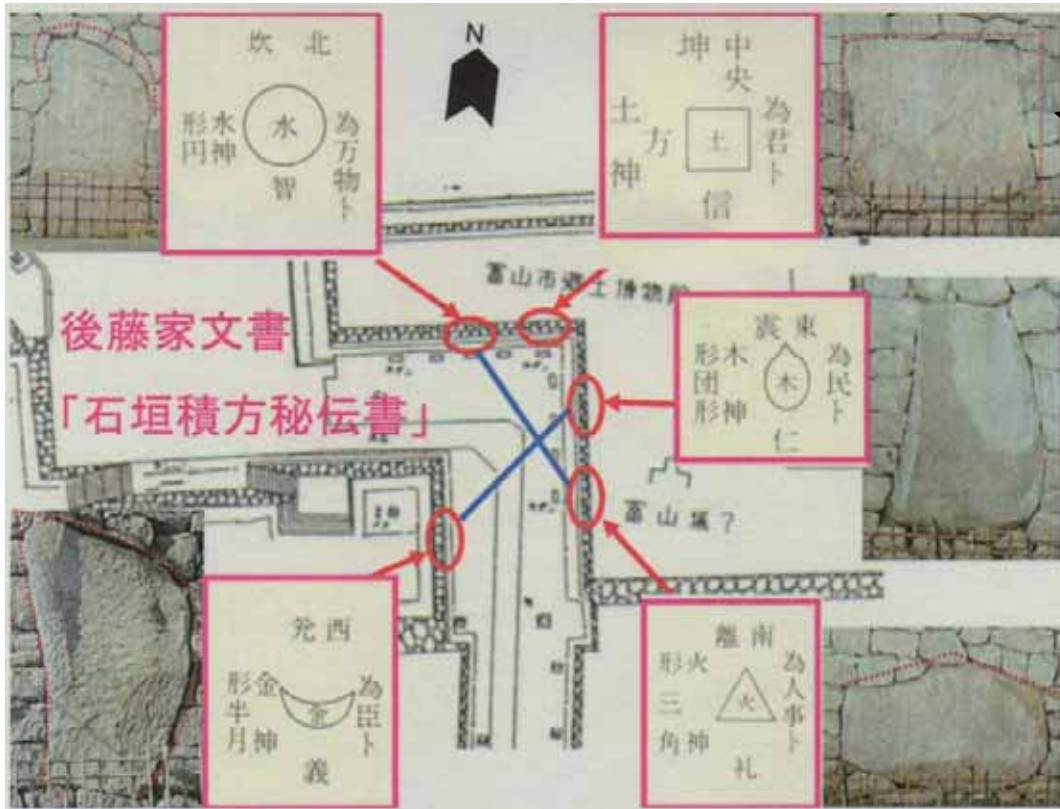


1 慶長期 2 富山藩初期 3 幕末

F 本丸大手筋石垣の変遷

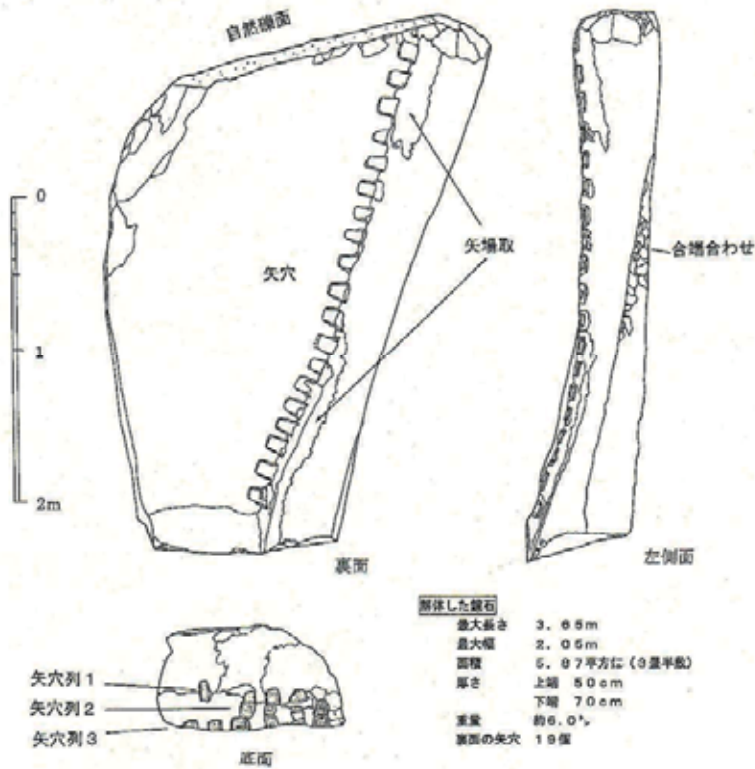


G 本丸大手筋（鉄門）石垣通路面の鏡石配置
鳥瞰図（南から）

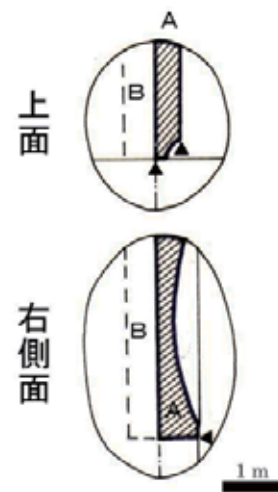


H 鏡石5石配置の理解 (試案)

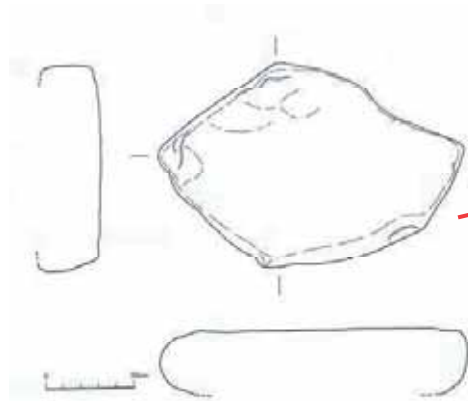
富山城鉄門石垣 鏡石1 裏面



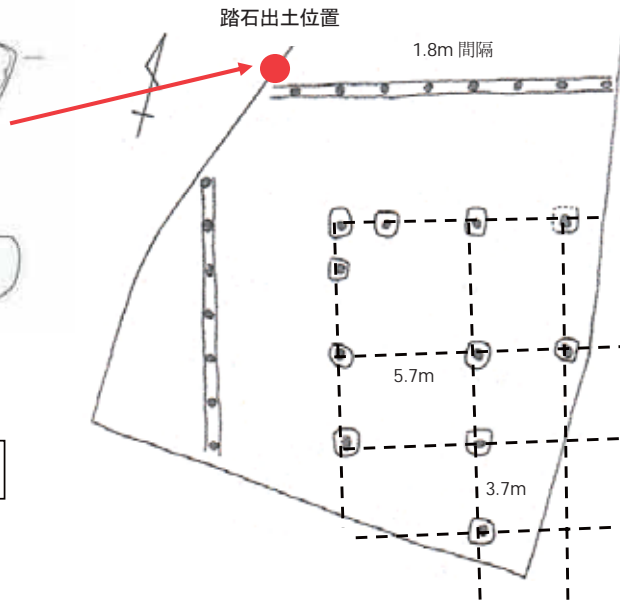
鏡石3の刻印



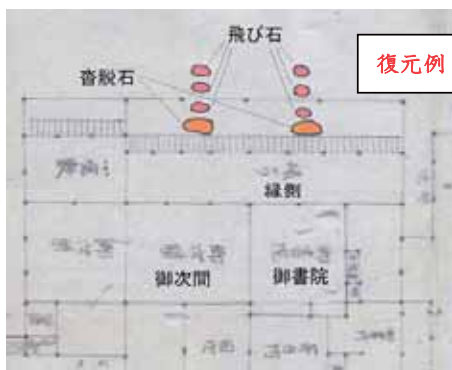
鏡石1における石割技術概念図



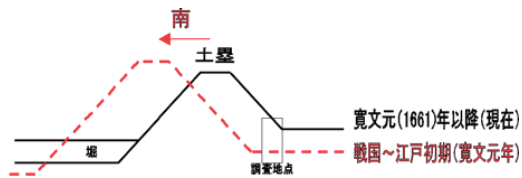
I 本丸御殿踏石 実測図



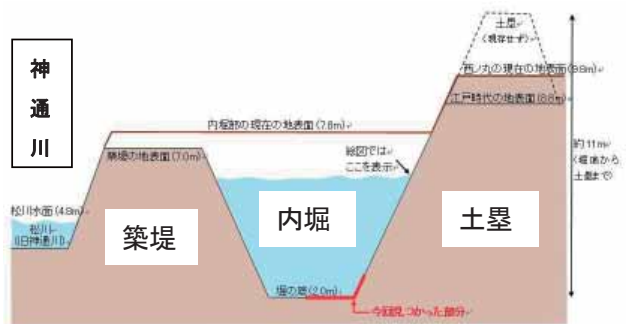
J 本丸御殿土台か



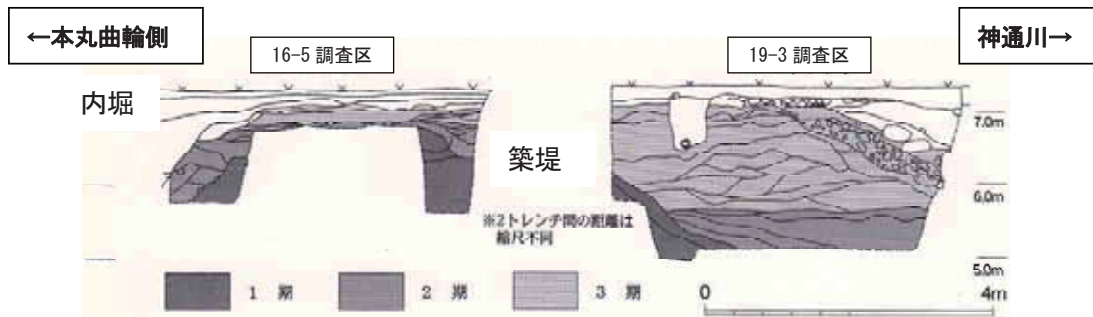
「富山御本城御屋形之図」



①本丸南辺土塁における土塁移動の様相 (模式図)



②西ノ丸北西内堀の発掘による復元模式図

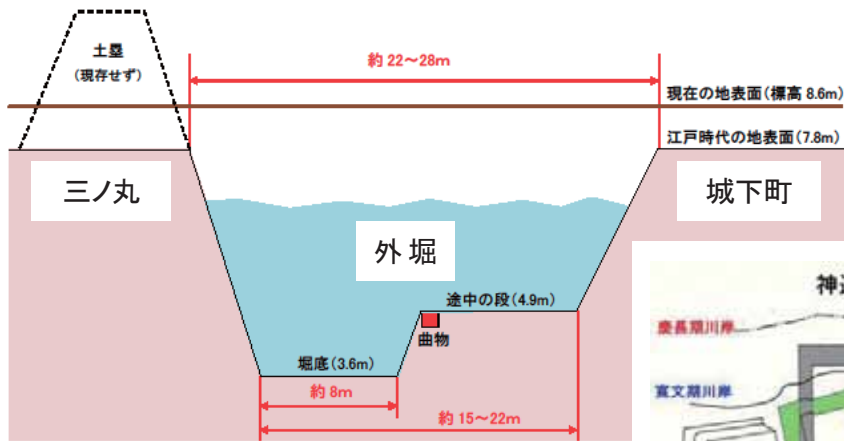


③本丸北辺内堀・築堤の断面図

K 内堀・土塁の発掘成果

L 富山城瓦の変遷と江戸加賀藩邸瓦の比較

	軒丸瓦	軒平瓦	平瓦
1期 慶長移御 本瓦葺き		A B 	 同心円叩き目痕
2期 江戸前期 本瓦葺き		 江戸加賀藩邸 出土1期金箔瓦	
3期 江戸後期 棧瓦葺き			 鬼瓦 千歳御門創建瓦 嘉永2年 在地産赤瓦
4期 明治頃 棧瓦葺き			



M 三ノ丸南辺 (大手門西) の外堀断面図



N 利長期と富山藩期の内郭の違いの理由

富山藩参勤交代一覧

和暦	西暦	富山	江戸	所要日数	藩主	備考	出典
寛文12	1672	4,10	→		2代正甫		吉川随筆上
延宝1	1673		←		2代正甫		
延宝2	1674		→	8,	2代正甫	家督継目のため江戸へ	前田氏家乗
延宝3	1675		←		2代正甫		
延宝4	1676		→		2代正甫		
延宝5	1677		←		2代正甫		
延宝6	1678		→		2代正甫		
延宝7	1679		←		2代正甫		
延宝8	1680	4,6	→		2代正甫	姫川洪水	吉川随筆
天和1	1681	5,4	←	4,23	12		吉川随筆
天和2	1682	4,2	→		2代正甫		吉川随筆
天和3	1683	5,9	←	4,29	11	2代正甫	4,27発駕予定2日延期
貞享1	1684	4,2	→	4,11	9	2代正甫	吉川随筆
貞享3	1686		←	4,4	2代正甫		吉川随筆
貞享4	1687	5,22	←	5,13	10	2代正甫	前田氏家乗
元禄1	1688	4,4	→	4,12	9	2代正甫	吉川随筆
元禄2	1689		←		2代正甫		
元禄3	1690	4,4	→		2代正甫		吉川随筆
元禄4	1691	5,5	←	4,26	10	2代正甫	姫川増水で逗留
元禄5	1692	4,4	→		2代正甫		吉川随筆
元禄6	1693	8,25	←	8,15	11	2代正甫	吉川随筆
元禄7	1694	8,5	→		2代正甫		吉川随筆
元禄8	1695	8,28	←	8,18	11	2代正甫	8,6登城の際正気無
元禄9	1696	8,4	→	8,13	10	2代正甫	吉川随筆
元禄10	1697	9,2	←	8,23	10	2代正甫	吉川随筆
元禄11	1698	8,6	→	8,15	10	2代正甫	吉川随筆
元禄12	1699	9,11	←	9,2	10	2代正甫	吉川随筆
元禄13	1700	8,9	→	8,18	10	2代正甫	吉川随筆
元禄14	1701		←	8,26	2代正甫		吉川随筆
元禄15	1702	8,13	→	8,22	10	2代正甫	8,6予定を7日延期
元禄16	1703	9,4	←	8,25	10	2代正甫	吉川随筆
宝永1	1704	8,13	→	8,22	10	2代正甫	吉川随筆
宝永2	1705	9,15	←		2代正甫		吉川随筆
宝永3	1705	4,	→		2代正甫	途中、糸魚川で死去	前田氏家乗
宝永4	1705	10,1	←		3代利興		前田氏家乗
宝永5	1705		→		3代利興		
宝永6	1705	?			3代利興	加賀藩主隠居で先に帰国のため中止命令	吉川随筆
宝永7	1705		←		3代利興		
正徳1	1705		→		3代利興		
正徳2	1706		←		3代利興		
正徳3	1707		→		3代利興		
正徳4	1708		←		3代利興		
正徳5	1709		→		3代利興		
享保1	1710		←		3代利興		
享保2	1711		→		3代利興		
享保3	1712		←		3代利興		
享保4	1713		→		3代利興		
享保5	1714		←		3代利興		
享保6	1715		→		3代利興		
享保7	1716		←		3代利興		
享保8	1717				3代利興	上米制(なし)	
享保9	1718		→		3代利興	上米制(9月富山→江戸)	
享保10	1719	8,	→		3代利興	上米制(3月江戸→富山)	
享保11	1720				3代利興	上米制(なし)	
享保12	1721		→	9,5	3代利興	上米制(9月富山→江戸)	吉川随筆
享保13	1722		←		3代利興	上米制(3月江戸→富山)	
享保14	1723				3代利興	上米制(なし)	
享保15	1724		→		3代利興	上米制廃止	
享保16	1725	7,9	→	7,18	10	4代利隆	吉川随筆
享保17	1726		←		4代利隆		
享保18	1727		→	7,15	4代利隆	鳳邪	吉川随筆
享保19	1728		←		4代利隆		
享保20	1729		→		4代利隆		
元文1	1730		←		4代利隆		
元文2	1731		→		4代利隆		
元文3	1732		←		4代利隆		
元文4	1733	10,15	→	10,24	10	4代利隆	吉川随筆
元文5	1734		←		4代利隆		

凡例 手取のあるもの
記録がなく推定

富山—新庄—糸魚川—高田—善光寺—上田—高崎—熊谷—桶川—板橋—駒込—本郷(上屋敷)
距離数 450 km
平均旅程 10.2 日
1日平均距離数 44.3 km

(参考) 宝永5年家中御法度 富山より江戸旅程
 3月～8月 9日
 9月～2月 10日

富山発の場合、町新庄(加賀藩領)で御返し(領内最後:城から3.8km、帰途も新庄で御迎)

MEMO
